

女神寮の敷地の隅っこで居候する男

自由の魔弾

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何でもない。何でもない男が居ただけ。その男は自分を特別視なんかしない。ただただその日その日を生き抜くことしか頭にないだけ。

宿なし飯なし職なし。恐怖の3拍子が揃った成人男性によるサバイバル物語が今、幕を開ける……かも？

目次

第1話	逮捕、そして略奪…。	1
第2話	焼失、そして再現。	12
第3話	奴隸、そして奉公。	25
第4話	改名、そして自制。	42
第5話	旅行、そして遭遇。	57
第6話	袋小路、そして強襲。	73

第1話 逮捕、そして略奪…。

「……今日は一段と日差しが厳しいな。あつ、そういうえば知ってます？日本は世界で最も皮膚がんの少ない国なんですつて。皮膚がんの最も多いオーストラリアやニュージーランドと比べて罹患率はおよそ1 / 1000、死亡率でも1 / 40から1 / 20なんです。だから太陽浴びて皮膚がんがうつてやつは意外と迷信なんですつてね」

俺はふと思いついた何かの本に書いてあつた受け売りを偉そうに語っていた。いきなりこんなこと言われても訳わからんつて思うかもしれないが、4月とはいえ狭い室内で面と向かつて長時間オツさんと2人きり。暑さもそうだが気持ちが悪入らない方が不思議なくらいだ。が、そんなことにへこたれる俺じゃない。俺自身が経験を積むことで、例えどんな状況でも楽しいと思える人間になってしまったと思いつ返すといつもその結論に至る。

「…あのな、俺が聞きたいのは蘊蓄じゃねえんだよ。俺だつてさあ、本当は今日非番だつたわけよ。この仕事してつとさあ、休みなんか申請したつて殆ど取れないわけ。分かる？その偶の休みをね、君がぶち壊してくれたんだよ。でも俺怒らない、だつてそれが俺の仕事だもん。だからね、お互い早く終わりにして帰りたいのは一緒なんだから……公園にテント張つて野宿してた理由、教えてよ？」

「……スパシーバ ザ ザボートウ。シルジエーチュナ ブラガーダリュ バス」

「……はっ？」

ありや？感謝の気持ちを込めてお礼を言つたつもりだつたんだけど……ロシアではちゃんと通じたぞ？あつ、もしかしてジェスチャーが足りんかつたか？もつとロシアっぽい動きとかすれば伝わるのか！

「わ…ワタシ、アナタ、アリガトウ。アナタ、ワタシ、カイホウセヨー」
「テメエおちよくつてんのかあ!?!いつペン死に晒せやアアア!!」

目の前のオツさんが腰に備え付けられたホルスターから拳銃を引

き抜いて俺の額に銃口を押し付ける。おいおい、日本の警察血気盛んだなあ、おい。

流石にこの狭い交番内でそれだけ騒げば、当然別の警官が向かってくるのは分かりきっていた。おつ、噂をすれば…。

「先輩、今度は何騒いでんですかあ……つて、先輩!?流石に銃はマズいっすよ!一般人に発砲なんかしたら懲戒免職っすく!」

「五月蠅エ!!俺は警察人生掛けてもこのエセロシア人をぶつ潰さなきゃ気が済まねえんだよ!!こんな奴の所為で俺の貴重な休日ペアだぞ!こいつ殺して俺も死ぬーっ!!」

「だ、駄目っす駄目っすく!?自分、先輩いなくなったら……生きていけないっす……」

「高田……お前……まさか……」

暴走するオツさん警官を止めに入ってくれたのは高田という女性警官だ。因みに身長も見た目も随分小柄でちんまりしてて、中学生みたいなお愛らしい人です。萌えって言葉が現実で当てはまる人ってああいうのを言うんだろうな、きつと。それにしても……あくあ、また始まったよ……茶番が。

「だって……先輩がいなくなったら、自分の仕事肩代わりしてくれる人がいなくなっちゃいますからっ!にやわ!!」

「高田、テメエ……今日という今日はもう許さん!!その腐りきった性根を叩き直してやる!!こっち来い!」

怒りゲージがMAXになったのか、オツさん警官が高田さんにコブラツイストを決める。うわっ、それパワハラ&セクシャルバイオレット!若い子、知らないか。

「あう、先輩期待させてごめんなさい」

「するかそんなもん!おいお前、調書の書き方分かってんだろ?さつさとそれ書いて消えろ……つたく、今度警察に厄介になるような真似したら、ど頭に風穴空けてやっかん!!覚悟しとけよ」

そう言っつて、俺1人を残してオツさんと高田さんは出て行ってしまった。なーんだ、ちゃんとロシア語って分かってたんじゃん。食えない人だなあ……さてと、ちゃっつちやと書くもん書いてトンスラする

かく。

「……うしつ、これでオツケー。オツさんの机の上に置いとけばいいから。あつ、そうだそうだ没収された俺のテント……うわあ！助かったら、これ無いと生きていけねーもんなあ！会いたかったぞー！」

オツさんに没収された愛用の折りたたみ式テントを回収し、俺はまたお天道様の下に姿を見せる。久方ぶりの太陽との対面、まさに生きてるって感じだ……大丈夫、あれが無くならない限り俺は死なない！「それじゃ早速……また公園にテント設置しに行こうぜー！ヒヤツホー♪」

俺は浮き足立つ気持ちを抑えきれずにひたすら駆け抜ける。生きてる心地がする、その事実だけが俺の生きがいだ。何者にも束縛されず風の向くまま気の向くまま……常軌を逸してるよな！

「……へえ、また面白い子発見♪うふふ……」

「うは〜！良かったあ！まだあの キング・オブ・ホームレス 宿無しの帝王」向かつちゃんに場所取られてなかった〜！これで今日は無事に寝れるわ……ふあ、何か急に眠くなってきた……まだ、夕方なのに……飯、調達……しない、と……ぐう……」

俺は不意に襲って来た睡魔に意識を持ってかれる。あれ、おかしいな……いつもなら夕方に眠くなることなんかないんだけど……俺、もしかしてどうかしちやったのか？

「……この薬品は煙だけでも人間を眠らせる効力がある。これ研究の成果ね……ところで君、運命の出会いって信じてたりする？」

……はあ？何言つてんだこいつ。つてか、誰だ俺に話しかけてんの……ああ、駄目だ……これ完全にお陀仏のパターンだ……来世で会おう……！

「……………んっ、うう……うあ、あ、あれ？俺、どうしたんだ……？確か、公園でテント張つてたら急に眠気が襲つて来て……でも、何で外じゃないんだ？つてか、そもそもここ何処？どっかの家……？」

目を覚ました俺の目の前に広がって来たのは、俺史上最高クラスの景色だった。冷暖房完備、布団あり冷蔵庫あり四方に壁あり！な、なんて贅沢な……！

「……………あれ？もう起きたんだ。意外と効き目短かつたなあ、今回の」
すぐ横から何となく聞き覚えのある声が聞こえてくる。あれ、これ何処で聞いたんだっけか……うおっ!!

「んっ、どうしたのボーツとしちやつて……あつ、もしかしてあたしの裸見て興奮しちやたく？ぐふふ……やらしい♪」

こ、これは……どう反応すればいい!?目が覚めたらすぐ側に半裸の女がいた！この状況を第三者視点から見た場合、まず俺が通報されるのは不可避！それに俺が捕まった場合、真っ先に俺の前に現れるのは……

(よお………何時間ぶりだったっけなあ？んなこたあどーでもいいんだわ。拳銃も使わねえと錆びちまうからよお………悪いが射撃訓練の的になってもらうぜえ!!間違つて頭貫通させちまったらゴメンなあ……!!ひやははははっ!!)

マズい、やる。あのオツさんなら間違いなく殺る！どんな手を使つても俺を練習台にしてぶっ放すに決まったらあ。なら、男がやるべ

きことはただ一つ。全世界よ、俺の勇姿を見よ……これが俺の生き様
じゃあああつ!!!

「すいませんでしたアアアアッ!!!」

俺は渾身の力を込めてジャパニーズベストごめんなさいを決める。
早い話、土下座だ。いや、無理だつて……起きてすぐにこの状況、分
かるわけないやん？俺、指詰めるしかないやん？軽めに言つて、切腹
もんやん？

だがこの状況、側から見たらどうだろうか？少なくとも上下関係は
保たれているはずだ。この女が何処の誰で何者なのかはこの際どう
でもいい！俺は今を凌ぎ今日を生きて、そして明日へ繋げる！それが
N・E・E・T・（なんか エッジの効いた エキストラっぽい 立
ち振る舞い方）じゃああアアアア!!

「君……やっぱり面白いっ！」

「へっ……？おわっ!?!」

何を血迷ったのか、突然俺に抱きついてくるこの女。うわっ、ちょ
待てよ！そんなことされたら俺の中のキムタクが覚醒すりゅ〜!?

「最初に見た時から思つてたけど、君つて結構変人だよね！それに
孝士くん」とは違う意味で面白いし……うふふっ♪」

「孝士くん……誰だそれ？ハムスターかなんか？」

「それ、多分こうしくんじゃない？グレーの奴の、とつとこの的な奴」

おやおやあ？何か話が噛み合わねえな……だがまあ、それでいい！
俺としては話題を逸らせれば何でもいいんだわ。適当に話を合わせ
ておいて隙を見て抜け出せば何ら問題ナツシングなわけよ。生憎逃
げただけは自信がある、この身体一つで何年もシヤバを生き抜いてき
たからな！今更俺に死角は……。

「つて、おわあああ!?!な、何で俺も裸!?!お、お前俺の服どうした……!?!」
「うふふふ、君は顔に似合わず立派なものを持つてるんだねえ〜。
じゅるり」

ひい!?く、食われた。間違はなく俺、食われた。何も知らない内に
訳もわかんねえまま……童貞食われた。俺、汚されちゃったよお〜!!
「まあ、ただ服剥ぎ取っただけなんだけどね。何か汚れてたし、あと単

純に臭ったから」

「俺の涙を返せ!!」

がるるるっ!! 駄目だ、この女には油断も隙も与えられん! 気を抜けば最後、自分でも気付かないうちに地獄に叩き落とされる……それくらいは平気でするだろうさ! 平常心だ、クールになれ。俺は強い、俺最強…。

「そんなに怒んなくてもいいじゃない。もしよければうちのお風呂使っっていいよ」

「な、何だと…!?!」

お風呂、世間一般ではそれ以上でもそれ以下でもない。だが俺にとつてはその存在は神の如く崇めるべき至高の存在!! お前らは1日1回風呂に浸かれることがどれだけ幸せなことが理解しているか?! いいや、してないね! 俺に言わせれば3日4日風呂に入らないことなんてザラだし、下手すら1週間……果ては公園の水飲み場の水を使つて深夜の行水! 夏はまだいいけど冬にアレやるとマジで死にそうになるだよなあ…。ともかく、年中宿無しの俺にとつても風呂は死活問題であり、同時に可能な限り浸からせて頂きたいです! ↑媚びた

「前向きに検討させて頂きます♡」

ああ……俺つてめっちゃ都合のいい奴。だが、それでいい! 生きていくのにプライドなんて邪魔なだけ! 今日を生きる為なら土下座して靴舐めるくらいは二つ返事するのが俺さ……超カッコ悪いけど。「ふふ〜素直でよろしい♪風呂は部屋を出てすぐにあるよ。あと……前を隠すものは要らないよねえ? ちよ〜と手で隠せるかどうかは心配みただけだ」

こ、こいつ……俺のわんぱくな愚息をバカにしやがって……ふっ、だがまあいいさ。久しぶりに風呂に浸かれるんだ。多少の粗相は目を瞑ろうじやないかふはははっ!

「おい、この際調子に乗つてるお前にも見せてやる。普段女どもからは全く想像のできない俺の流儀をとくと堪能しやがれ! まず第一にイ……恥を捨てよ!!」

俺はその場に立ち上がり、布団で覆っていた俺の裸体を目の前の女

に向けて晒す。ふっ…眩しくて見えないうら。こうなったら恥ずかしがった方が負けだ。先に手を出して来たのはそっちなんだからなあ？やったら最後、完膚なきまでに…叩き潰すっ!!

「第二にイ…浴室まではランウェイであると思え!!脱衣所は舞台袖だ、浴場はステージ!そしてその主役選ばれたのはこの俺エー!」

「うわあ、変なスイッチ入っちゃったよ。やっぱ良いわあ…」

半裸の女が何か言っている気がするがそんなの関係ねえ!それになあ…まだ最後の儀式が終わってねえんだよ!!

「そして第三ッ!!周りの奴らに舐められるな。他者を蹴落とす覚悟で準備し戦いに臨め!!自分のポテンシャルを全て発揮しろおオラア!!」

俺は自分の身に起こっている変化が手にとるように分かる!ああ、そうだ…男が舐められないようにすることって言ったらアレしかねえもんな!!みるみる硬くなつて来たゼエ!!臨戦態勢、しゃオラアいくゾォー!!

「オラオラア!!死神様のお通り、だ…:…っ」

「へっ…うあ、ああ…!」

俺はふと目の前の光景を見た瞬間、時間が止まったのを初めて体感した。えー、まず状況を説明しようか。浴場の扉を開けたら、中にさっきの女とは違う女がいたのね。それも複数人、多分4人かな。んで、みんな俺の方見てるわけ。そりゃいきなり扉開いたらそっち見るよね?学校で遅刻して来た奴が扉開けたらみんな一斉にそいつの方見る奴、アレと一緒によ。んで、今度俺の状況ね。イキってたからさ、タオルなんか要らねえよって何も隠すもの無くて突入しちゃったのな。そんでもって俺、さっき舐められないように見栄張っちゃったから、もう下バツキバキなんだわ。めっちゃ反り返ってるんだわ。そりゃそうだよ、だつて男の子だもん。だから、こういう状況つてこの後どういうことが起きるか何となく予想出来るじゃん?でもね、そこで言い訳するのは二流なの。本物は…何事も無かったかのように振る舞う、これが正解なわけ。邪な心を持ってから争いになるのです。その証拠にほら、みんな憤怒の表情で俺に襲いかかってきてぎやあああああっ!!!

「紹介が遅れたね。ここは星間女子大学生寮の『女神寮』だよ。そしてあたしは大学四回生のみねる、宜しくね。んで、さっきの鬼女どもが…右からきりやちゃん、フレイちゃん、せれねちゃん…そして、奥で鼻血出して悶えてるのがあてなちゃん。どう、ちゃんと覚えた？」

ああ、ちゃんと分かったさ。お前らがグルになって俺を嵌めたってことがなあ!!全部予定調和だったんだろうがしようもねえ小芝居しやがって…結局、俺童貞食われてなかったじゃんかよ!良かったよ逆に!そこはドッキリで済ませてくれてどうもありがとう!だがそれとこれは話が別だ!断固として文句を言わせてもらおうぜ!!

「あうえく!!えあういおあうううあおえいあつえうおおえんうあうえく!!」

「あはははっ!何言ってるか全然分かんないよ。じゃあ、特別に猿轡だけ外してあげる」

俺の口にジャストフィットされていた猿轡が外され、俺は漸く発言の自由を得たようだぜ。死刑囚がこれをされるのは側から見たら滑稽だからかもしれねえな。

「ぶはっ…いお、俺は無実だ!その悪魔に唆されて洗脳されてただけだー!!だから今すぐ椅子の後ろで手縛ってんのと目隠し外せーっ!!」

俺の訴えを嘲笑うかのように何処からともなく取り出したカメラでパシャパシャと俺の情けない写真を撮りまくる悪魔女。くっ、俺史上…最大の屈辱!!これなら野良犬のうんこ食えって言われてる方がまだマシだった。いやそっちも嫌だけどせめて尊厳は保てた気がする。俺、何もしてないじゃん…。

「ぎーて、ここからはお楽しみ時間の尋問タイムと洒落込もうかなあ。孝士くんが帰ってくる前に済ませとかないとねえ……多分、刺激強めだからさ♪まず、自己紹介してくれるかな？因みにさつき書いた調書は確認済みだから嘘言ったら分かるからね。その時は……くふふ、ぐふふ……」

くつ……このみねるとかいいう女、抜かりない！ということは俺が所々空欄で出した調書の意味が分かってないようだな。いや、こいつらだけじゃない……この世界で俺のことを理解してくれる人間なんて1人もいないんだ。だから俺はあの日からずっと1人で生きていかなくちやいけなくなっただ。それを今更……この生き方を変えなんて情けねえこと、俺には選べねえ!!

いいぜ、ここからお互い我慢比べだ。俺がお前らに話したくなるように仕向けてきな。もし俺が折れたその時は……全部包み隠さず話してやるよ！さあ、かかってきな!!

「…俺は、俺だ。名前なんか無えよ。歳は20、住所職業ついでに明日の飯も全部無し。普段は世界中の色んな所を点々としてる。以上」

どうだ、面食らって何も言えねえだろ。そうだろそうだろ……こんな特異な人生歩んでる奴なんてそうそういるわけがな

「ふーん、何か孝士くんと被ってんなあ。最近流行ってんのかねえ無一文になるのって。みんな、どー思う？」

えっ!?

「そうだねえ……確かに孝士くんと似てる、のかな？でも流石に成人してるなら働いた方がいいと思うけど。まあ行くあてが無いんだつたらここに居ればいいんじゃないかな」

はう!?

「うーん、あつーもしよければ私の作ったコスプレ衣装のモデルになればいいのでは！孝士くんより身長もあるしがつしりしてるみただし……うふふ、作業が捗りそうだわーっ」

い、いや……ちよ、ちよつと待って……

「夜食……作れる？出来るなら、居てもいい……」

は、はあ……？いやいやいや、何なんこの人たち!?!何であんな怪しい

自己紹介あっさり受け入れちゃってんの!?! 仮にも年頃の娘たちだろ!?! そんな反応してくるなんて……

「ち、ちよつと待って下さい!! 皆さん、なんか自然とこの人受け入れるみたいな流れになってますけど、おかしくないですか!?! 孝士くんだけでも今大変なのに、それより歳上のお、男の人までなんて……」

……そ、そうだよ。その反応が欲しかったんだよ。当たり前じゃないか、どうして俺なんかを受け入れられると思えるんだよ。普通、無理だぜ……一瞬でも、そんなことを夢見た俺がいけないんだ。始めから分かっていたことじゃないか。この世界に俺を受け入れてくれる場所なんかない、だからこそ俺が生きたその場所を自分の場所にしなきゃ駄目なんだ。ねだるな、勝ち取れ……俺なら出来るはずだ。

「……くっ、ふふっ、ふふふはははっ……あははははははっ! いや、面白いものを見せてもらったよ。そこの『早乙女 あてな』の言う通りだよ。君たち、危機感無すぎなんじゃないの? 若い女が若い男をどうこう出来るなんて本気で思ってるわけ? 全くお笑いだよ……」

「ち、ちよつとあなた! そんな言い方……!」

さっきの子が俺に僅かながら怒りの感情をぶつけてくる。そうだが、それでいい……そうすれば別れが辛くなくなる。一瞬でも彼女たちに心を許してしまった俺の落ち度だ、なら最後は派手に花火をあげようじゃないか!

「気に障ったかい? 悪いね、こういう言い方しか出来なくて……残念だったな『和知 みねる』! どうやら俺はあなたのお眼鏡に叶いそうもないらしい。それに『戦咲 きりや』、『八月朔日 せれね』、そして『ブレイ』……ああ、それは偽名だったな。そして、今この場に居ない『南雲 孝士』くん……あんたらに俺の生き方は邪魔させないよ。いつだって俺を助けてくれるのは……俺自身だ。あばよ!」

俺は話してる途中で布で結んであった手の拘束を外して見せて、徐に目隠しをとる。ふう……漸く視界がスッキリするわい……って、うおっ!?

「お、お前ら……何でまだ服着てねえんだよ!?! ってか、今まで黙って裸のまま聞いてたんか……み、みねる!?! お前なんでさつきより服脱いで

んだ!?それより俺のパンツ返せ!!アレ一個しか持ってねーんだぞ俺!
!>く、くっそおお!!こんな所、二度と来るかああ!!」

俺はなりふり構わず一目散にその場を立ち去った。途中、若い男の子とすれ違ったけど多分アレが孝士くんなのだろう。あんな破茶滅茶な女どもに振り回されるなんて可哀想な子だ。一体どんな弱みを握られているんだか……いや、違うな。彼女たちはそんな悪い人間じゃない、それは嫌でも分かってたさ。だからこそ怖いんだ。そんな彼女たちでさえ、俺は打ち解けることが出来ないんじゃないかって……全部話せば、楽になるのか?いや、駄目だ!これは俺の中でしか生きられない、そして墓場まで持っていかなきゃいけない秘密だ。危うく大事なことを忘れる所だったよ……俺のテント、あの悪魔どもの巣窟に置き忘れて来たことを。

第2話 焼失、そして再現。

前回までのあらすじ！白昼堂々公園にテント貼って警察に捕まった俺は、その後無事に解放されるも謎の奇病により意識を失ってしまふ。そして再び目を覚ました時、そこはまるで別世界へと誘われていた……とか思ってた瞬間もあったわな。蓋を開ければ出て来たのはやれ悪魔の様な女どもだ。おまけに俺の人生の苦楽を共に過ごしてきたテンちゃん（愛用の折りたたみ式テント）まで人質にとりやがって……許すまじ！

「今回のミッションはあの悪魔どもの巣窟からテンちゃんを救出することか。1番の難所はテンちゃんが何処に捕まってるかが分からないってことくらいだな……昼間に忍び込めば心置きなく探せるだろう」
思い返すだけで身体に悪寒が走るのが分かる。だが大丈夫、俺は昨日の時点でちゃんと言い残していたからな。こんな場所二度と来るかく！ってね、そりゃ普通は来ないと思うでしょ？人間の思い込みって怖いよね。それに話を聞いた限りじゃあの女どもは全員大学生の筈、なら少なくとも平日の昼間は誰も居ないだろうさ！ふっふっふ……我ながら策士だぜ、俺。

「……って、何でお前ら居るんだアアアアッ!!縄解けコラアアアアアッ!!」

なんてなことを思ってた時期もありました。くっそ、こいつらまともにも大学通ってんじゃねえのかよ!?何で揃いも揃って寮に屯してんだよ……学校はちゃんと毎日通わなきゃ駄目なんだぞ！ちゃんと通えるうちが華なのに…。

「みねるちゃんの言ったとおりだったわね。ホシは必ず現場に戻ってくるって」

「はあ…まさか昨日の今日で蜻蛉返りするなんて。しかもご丁寧に真っ昼間から施錠してた正面玄関の鍵をピッキングでこじ開けるなんて…君つてば予想以上にクレイジーだねえ♪」

「誰がクレイジーゴナクレイジーだ!! ってか、玄関入って一步踏み入れたら捕縛トラップが発動して俺逆さまで宙吊りなんだが!? 昨日こんな無かつたらうが!」

「ふっふ〜ん♪負け犬の遠吠え…最高オ♡」

あ、悪魔だ…! この女、悪魔だ…! それにさっきから俺の顔とか身体とかを指でなぞってるフレイとかいう女…それって何の意図があるの!?

「うふふ、みねるちゃんったらそんなに虐めちゃ可哀想だよ。ねえ、君…: やっぱり私専属のモデル、やってみない? 改めて近くで見ると、すっごく男らしい身体してるの分かるわあ♪」

「おっ、本当かね? どれどれ…: ほほう、これは中々…: んっ、この背中のは傷は? 随分と深いようだけど…」

「…っ!?! な、何でもない! 何でもないぞ、それっ!!」

みねる達が俺の背中にある古傷に触れようとしたことに気づき、慌てて取り繕うように隠す。あ、危ねえ…: 油断せずに行こうって決めたらばっかじゃなか、俺! 早速ボロを出してどうすんだ全く!

兎に角、この隙に話題を変えないといけねえな。

「そ、そうだ! 俺がこんなことしたのはちやんと理由があるんだ! 昨日、ここにテント置き忘れただろ? それを返して欲しかっただけなんだよ。な、頼むよこの通りっ」

俺は精一杯の思いを込めて頭を下げる。あつ、俺宙吊りだから下げるっていうか上げるのほうの説明的には正しいのか? あつ、やべ…: ずっと宙吊り状態で流石に頭に血い上ってきた…: 。

「ただいま…: って、何この状況!? 何で宙吊り!」

「おっ、きりやちゃんお帰り。丁度いいや、きりやちゃんも尋問手伝ってよ」

「へっ?……いやいやいや、この人昨日の人でしょ!?何で今日も……って、もう既に行き着く所まで行っちゃってるような気がするんだけど!?白目むいて口から泡が……と、兎に角下ろしてあげないとおぼくは頭を持つから2人は足を持つて」

うっ、うぐう………はっ!や、やべえ……今完全に意識飛んでた。俺、どこまで話したっけ……そもそも俺、何しに来たんだっけ……あ、あれ?何か頭の辺りに柔らかい感触が……これは枕?いや違うな。それにいい匂いもする……んっ?

「君、大丈夫?多分ずっと宙吊りの状態で頭に血が上ったんだろうから、楽な体勢を維持するために少しの間『膝枕』をさせてもらおうよ?ボクのじゃあまり気持ちのいいものじゃないかもしれないけど、血行が良くなるまで我慢できるよね?」

虚ろな意識の中、優しくそう語りかける声が聞こえてきた気がする。これは、この包まれる様な感覚……なんだかすごく心地が良い。それに……どこか懐かしい気がする。その証拠に俺の心は今、こんなにも幸せな気持ちで溢れているんだから。

「あつ、ねえ君!しっかりして……って何だ、眠ってしまっただけか。ふふっ、よく見たら可愛い寝顔じゃないか……♪」

「うふふっ、きりやちゃんってばお姉さんみたい♪お姉ちゃん♡」
「いや、どちらかと言えばお母さんって感じでしょ。ほれほれママ、ミルク♡」

「うわあ!ふ、2人とも押さないで……きやつ!?あまり騒ぐとこの人起きちゃうからっ!」

「本っ当ぐに迷惑をお掛けしました!!」

開口一番でそう口走ったのは俺だ。暫く「ぐーすやぴー」してしまったこともあり、だいぶ日が落ちてしまったようだ。あと、俺が意識を失っている間に、あの場に居なかった筈のきりや、せれね、あてな、あと噂の孝士くんが集結していた。まあこの状況は完全に俺のアーウェーなわけで、正直なところちゃんと話せる機会を設けることが出来て心底よかったと思ってる。この際、色々とはつきりさせておきたいことがあるようだし。

「むう……急に態度を軟化させるなんて、今度は何を企んでいるんですかっ」

あてなが否応無しに俺の言葉を全否定してくる……5mくらい先から。どうでもいいことだけど、そんなに離れられると普通に話しづらい。そんなことを考えていると、不意に近づいてきたみねるが俺にだけ聞こえるように耳打ちをしてきた。

「(あてなちゃん、極度の男嫌いだから触れるのはおろか視界に入れるのもやっとなの。だからそこは理解してあげて♪)」

そうだったのか……それはまた難儀な性格なこと。要するに近づかないきやいって話だな？ だったら手っ取り早い、俺もそういう話をしようと思っていたところだ。

「別に何も企んでなんかないし、それに俺も同じことを言おうと思っていたところだ。確かに俺は昨日の一件で責められても文句は言えない立場であることは事実！ だがこうも考えられないか？ そもそも何故公園で倒れたはずの俺が目を覚ました時には既にここにいたのかと。君たちだって女子寮に男がいるのは不思議だったんじゃないか？」

俺の疑問提言にピクツと反応する一同。そうだ、考えてもみてくれ。意識を失っているはずの俺が一人で勝手に動き回る訳がない。だとすれば、俺を移動させた第三者……或いはその事実を知る者が必ずいるはずだ。特に俺の顔の横で妙な笑みを浮かべているこいつとかなあ!!

「いだだだだだっ!?!ぼ、暴力反対!暴力反対!」

「おらっ、みねる。お前なんか知ってんだろ? この際こいつらにちや

んと洗いざらいゲロっちまえよ」

みねるの首根っこを掴み上げて糾弾の場に引き摺り出すことに成功する。どうやら唯一真相を知ってるのはこいつだけのようなだけえ…。

「みねる先輩！どうなんですか？」

やけに圧が強いあてなに急かされて、もはや逃げ道を封じられたみねる。さあ観念しやがれ。あと俺のテント返しやがれ。

そんな呪いの言葉を内心連ねていると、本当に観念したのかみねるが若干頬を染めながら答えを返した。

「だってえ……実験用のモルモット、欲しかったんだもん♡」

このマッドサイエンティスト、漸く本性現しやがったな。どうだお前ら、これで誰が諸悪の根源かハッキリしただろうに。

「みねる先輩！なんでそんな捨て犬拾ってきたみたいな軽いノリで誘拐してくるんですかあ!!ま、まさか孝士くんを味を占めたんじや……だ、駄目ですよ！これ以上男の人が寮内に溢れるなんて……」

「そお？あてなちゃん以外は結構前向きみたいだけど？」

みねるの言葉を受けて残りのメンバーの方へバツと振り返るあてな。その反応は個人によってまちまちだったが、概ね同じような意見であった。

「私は別に構わないわあ。ちよ〜とだけ趣味のコスプレに付き合ってくれるなら♪」

「ボクも反対しないよ。初めは少し怖い人なのかなって思ったけど、今は全然感じてないし」

「……夜食と雑用、出来るなら誰でもいい」

「お、俺も全然オツケーっすよ！寧ろ男仲間が増えて心強いつす「ちっぴーう!!」ひ、ひい!!」

あらら、折角孝士くん発言したのにあてなに封殺されちゃってら。可哀想可哀想なのだ。

「皆さん、忘れてませんか!?ここ女子寮なんですよ！孝士くんが寮母さんになるのもかなり無理矢理誤魔化したのに、この人なんてもっと置いておける理由無いじゃないですか！」

「…そうは言ってもねえ、これっでもう殆ど決定事項みたいなもんなんだよね〜」

「ど、どうしてですかっ!?この人にそこまでのことをしなきゃいけない理由なんか無いでしょう!?みねる先輩、もしかして何か弱みを握られているんじゃない?」

あてなの飛躍した想像が雲行きを怪しくしていく。いや、俺だっつて早くテント返してくれば速攻で退散するつもりだぞ?」

「おい、みねる。あてなの言う通りだ…俺の都合だけで勝手に決めるのは良くない。それに男性嫌いなんで難儀な性格のあてなだけが被害受けるのは不公平じゃんか。俺はテントさえ返してもらえればすぐに消えてやるよ。あてなもそれで良いだろーっ?」

俺は5m先のあてなに向かって確認をとる。こう言うことは多数決で決めちや絶対に駄目だ。一人でも反対意見があるならその意見を優先するべきだ。特に目覚ましい答えは返ってこなかったが、心のうちは嫌でも理解させられる。さあ、俺も旅立ちの時だ…。

「うしっ、じゃあこれで決まりだ。俺はここを出てくつてことで…色々世話になったな。短い間だったけど、久々に楽しかったぜ!」

俺はこの2日間で抱いた嘘偽りのない思いの丈をぶつける。これは本当なんだぜ?自分でも驚いてるけどな…なんかすっげ〜久しぶりに人の温かさって奴に触れた気がするぜ。でも、それも今日までの付き合いだ…明日からはまた1人、当てのない旅が始まるんだ!だからって全然心細くはないんだぜ?だって俺にはいつも苦楽を共にしてきた頼れる相棒がいるんだからな!

「…分かったよ、今回はあたしの負け。君のテントは玄関出てすぐの所に置いておいたから、持っていいよ…でも、もし気が変わったらいつでも戻ってきて良いからね♪」

みねるが柄にもなく口元を手で押さえながらそう口にする。ふっ…何だかんだ言っても、こいつも人の子じゃんか。いいや、俺は責めないぞ。最後の最後までカッコ良くキザに決めてやるんだ!

「…ふっ、そんな恥ずかしい真似出来るかよ。男に二言はねえ…じゃあな」

ふっ…だがそいつは見込み違いだぜ。俺は侍でも武士でもねえ…：現代に生きる住所不定無職20歳の成人男性だぜ？自分の言葉に重圧を感じることなければ、責任を負う覚悟もねえ！ただ1つ、譲れないものがあるとするならば…：そいつはなあ!!

「先程のみねる様の申し出、現時点でもまだ有効でしょうか!?しからばこの豚を貴方様の元で奴隷として扱って下さいませ!!」

俺は地面に頭を打ち付け、額から血が出るほどに擦り合わせ地べたを這う。どうだ…：これが本気の土下座である！言葉や見せかけの姿勢だけの薄っぺらい誠意とはわけが違う、自らの命を賭した一世一代の大博打…：それが土下座だ!!土下座はなあいわば切り札なんだよ。切ったら最後、通用しませんでしたじゃ話にならないのさ。だからこそ信憑性を帯びさせるために最後の最後までプライドをかけて鞘に納めておくんだ。そして、これ以上は不味いと悟ったその瞬間にグワアアアツと振り抜く…：それが現代に生きる侍の流儀であるのさ。あとこんな長々と喋っててもう大体みんな見当ついていると思うけど、俺もうそろそろ貧血で限界…：…!

「…：…ってなことがあったわけですよ。んで、暫くその寮でお世話になることになったので、せめてオツさんと高田さんには知らせておこうと思ひまして。ほら、俺が何かポカやらかした時に連絡先知っておけば、何かと便利でしょう?だから」

《だからこんなド深夜にわざわざ俺に鬼電仕掛けてきやがったわけか…：…おい、今度うちに顔出した時は遺書も持ってこいよ。手が滑って発砲しちまうかもしれねえからなあ?》

「…や、やだなあ。日本の警察大好きよ、あたし?ジャパニーズポリ

ス、ワツシヨイワツシヨイ！」

《……どうもおちよくつてんな？ やっぱお前死刑。俺の警察人生賭けてもお前を地獄に送り込んでやる》

ノーツ!? 何でそうなるの!? 俺、オツさんには結構感謝してんのになあ……しゃーない、とっておきの情報あげちゃお。

「それより、明日2丁目の連続窃盗事件の容疑者宅のガサ入れですよね? そいつ、自分の名義を他人に売ってるだけの白なんで交友関係徹底的に洗って下さい。最近妙に小分けで現金振り込まれた形跡とかあれば、その取引相手がホンボシだと思います。これオフレコで頼みますよ?」

《……毎度毎度どこから仕入れてくるんだか。お前を生かしておいて得だと思っただのはこういう時くらいなものだ。情報提供、感謝する》
「はいはい、ではでは……ふう、警察も楽じゃないねえ」

俺はオツさんへの不定期連絡を終え、寮内に戻る。因みにこれは俺の本業とはなくんも関係ない謂わばアルバイトみたいなものだ。簡単に言うなら元警視庁捜査一課の刑事だったオツさんとはエスの関係だ。エスの意味は自分で調べてくれよな? あんだけ無職無職言ってる心苦しいところもあるけど、別に嘘は言ってるねえし。確かに「日本では」無職だし……って、俺誰に向けて言い訳してんだ?

「……あれ、偶然だね。もしかして君もこれからお風呂?」

割り当てられた部屋に戻ろうとしたら、背後から声を掛けられる。やべつ、今話してた内容とか書かれてねえだろうな?

「んあ? ああ、赤毛ちゃんか。いんや、これから部屋に戻って同室の孝士くんとても親睦を深めよっかな? って考えてただけだ……って、何顔真っ赤にして想像してんだよ。やらび〜♡」

「んなつ!? そ、そんなことないよお! 君の考えすぎだつ」

本当かなあ? 当てにならないぞ、あの顔は。ともあれここで言っただけのこととはさつきのは聞かれずに済んだってことよな。えがったえがった。さっさと退散しよう。

「なっはっは! ほうかほうか、じゃあわてくしこれから純朴な少年といたいいなせめぎ合い(トランプのババ抜き)を繰り広げるので……」

五月蠅かったらごめんねえ！」

そう言つて踵を返す俺だったが、何故か俺の身体はそれ以上前に進まない。な、何故!?!と勝手にパニックつてたら知らず知らずのうちに、俺の手を掴んで離さない野郎がいることに気がついた。わざわざ言うまでもなく、赤毛ちゃんだ。

「お、男の子同士とはいえそういうことはしちや駄目だよ?なんか不純な君を孝士くんの近くに置いておいたら駄目な気がしてきた……今日はボクと清純さについて語り明かそう!ほら、行くよっ」

「へっ?おわああああつ!!!ふ、ふぎけんな!俺は孝士くんとデュエルすんだよおああ?！」

俺の必死の抵抗を無視して二階の赤毛ちゃんの部屋まで引き摺り回される。ぐう……こ、こいつ意味わかんない。俺になんか恨みでもあんの?

「ぐべっ?!痛つ……お、おい赤毛ちゃんよお!流石に奴隷に成り下がった俺でも今のは怒つても文句ねえと思うんだが!」

「シヤラップ!君には人間として圧倒的に足りないものがある!それが何か分かるかい?」

赤毛ちゃんが妙にうずうずした様子で俺に問いかける。え、何これ答えないと駄目な感じ?つてか、今改めて思ったけど……赤毛ちゃんの部屋、めつちや乙女チックじゃん。特に本棚ね……恋愛という名のフィクションの嵐が半端ない漫画がズラーリと並んだらあ。はあく、人って分からんもんだねえ。つて、そんなこと考えてる場合じゃなかった。俺に足りないものだったか?うーん、そうだなあ……

「強いて言うなら……『愛』?うわあ!恥ずかしく!?!20にもなつて愛が足りないとか口走つてる自分が恥ずかしく!!」

これもう軽く拷問だよな?何なの愛が足りないって……こちとら中学生じゃねえんだよ!もう20歳のおじさんなの!いちいち辱めないでよ、ぶんぶん!

「そう、そうだよ!君に足りないのは愛だ!何だ、ちゃんと分かっているじゃないか♪」

「……はあ?」

いや、これマジで正解が分からん。この赤毛ちゃんは何を言っているのだい？

「昨日今日と君の言動を見ていたが、何だいなあ、全く心にも思っていない言葉の羅列は!? 死んだ魚の様な目で死んだ魚の様な口から死んだ魚の様な言葉を言い放っていたじゃないか!」

「それほぼ死んだ魚じゃねえか。え、何俺死んだ魚みたいに認識されてるの? 半魚人かよ」

この赤毛ちゃん、さっきの俺と孝士くんのいたいけ妄想から頭パンクしっぱなしなんだよ絶対。だって何言ってるか訳わかんねえもん。俺絶対悪くないもん!

「と、兎に角君には言葉で言っても分からないだろうから実践あるのみだ! この参考書のとおりによってみれば、自然と心も付いてくるはずさ! さあ、立って立って」

うわあ… やっぱ出てきちゃったよ、あの恋愛少女漫画。めっちゃグイグイ勧めてくるやん… うわつ、何これ。俺こんな小っ恥ずかしいことせなあかんの? 壁ドン? 顎クイ? 頭ポンポン? ギャハハハハハッ!! に、似合わねえ?! こんな現実でやったら通報されて捕まりますから! おいおい、やべえもん売ってんなあ日本は。こんな読んでたらそりや変な知識ばっかつくわけだぜ。

「ほら、まずは導入編の壁ドンからだよ! ボクをこの漫画の主人公の女の子だと思っこの台詞の通りに… この壁に背を向けてやってみようっ」

何でそんなワクワクしてるのよ、赤毛ちゃん。ってか、これ終わらせないと返してもらえない系のやつかあ? しやーなしだなあ、気は進まねえがちやつちやと終わらせるか。

「え〜つと、何々? おい、お前どこ行くつもりだよ? ふふつ、駄目。俺以外によそ見すんの、禁止♡ …… ぷつ、ぷくくつ、くふつ… ぷはあ!! も、もう駄目だ… は、腹痛い… ひいひい… うははははっ!」
「にや! バ、バカにしないでよお! これは主人公の女の子とツンデレの彼が初めて急接近する胸キュン必至の名シーンなんだからあ! ほら、やるよー!」

ぷくく、あーやば。こんなに笑ったの久しぶり。まあ台詞は何となく覚えたわ。問題は壁ドンとかいうやつか…要するにドーン！って感じだよな？よしっ、やってみよう。

「はあく、なんかすっげ〜アホらしいけど、俺今女神寮の住人の奴隷だからなあ。従いますよ、ご主人様…：んんっ！オイオマエ、ドコイクツモリダヨ？壁…：ドーン！！」

俺は渾身の棒演技と壁に向かって指を差し、ドーン！と叫んだ。うん、ポカンとする赤毛ちゃん。思ってたんと違ったか？

「な、何それ？もおーちゃんとやってよっ！」

ずいっと身を乗り出して抗議してくる赤毛ちゃん。おま、喪○福造知らんけ？そんなにぷりぷりしなくてもいーじゃんかよ、まったくよお。

「はいはい、んじや真面目にやりますよ…：…：おいお前、どこ行くつもりだよ？」

「っ!？」

俺はさつきまでの気怠げな態度を改めて、赤毛ちゃんへ一気に肉迫する。赤毛ちゃんの顔の横に左手を突き出し、壁に押し当てることで退路を封じ距離を詰める。突然の豹変ぶりに驚いているのか口をパクパクさせて呆けている赤毛ちゃんに対して追撃を仕掛ける。

「…ふふっ、駄〜目♪」

「ひゃっ!？」

慌てて視線を逸らそうとする赤毛ちゃんの顎を空いている右手で持ち、強引に視線を交わす。第2ステップの顎クイが成功したようだぜ。さあ、最後の追い込みだ…：御所望通り、こいつで赤毛ちゃんを陥落させる！

「俺以外によそ見すんの…：…：きん・し♡」

「~~~~っ!!?は、はう…：／／」

最終ステップの頭ポンポンからの予定になかった耳打ちのコンボを決める。すると、あれまああれまと顔を紅潮させる赤毛ちゃん。おっ、意外と初心…？そして、見るからに恍惚の表情をしていた。ほうかほうか、赤毛ちゃんはこういうのが好きなんかあ。乙女だねえ

…。

「んじや、俺は孝士くんとデュエルしに行くから。赤毛ちゃんも早く寝るんだぞ〜」

未だにフリーズする赤毛ちゃんを放っておいて、俺は赤毛ちゃんの部屋を立ち去る。暫くして雄叫びの様な声と何かの衝撃音が聞こえてきたが、多分これとは関係ないだろうさ。それにしても変な趣味だなあ……昨日今日知り合ったばかりの俺に少女漫画の再現させるの。孝士くんとか大変だろうな、見るからに流され体質だもんね彼って。「ふあ〜……とりあえず孝士くんと遊んでから、お仕事するかあ。何にしても時差ボケはどうにかせんとなあ……眠っ」

そんな上辺だけの奮起を自分に言い聞かせると、俺は孝士くんの待つ一階の和室へと足を運ぶ。つてか、同室だから終わったらそのまま寝るし……そしたら時間見計らって活動するかあ。

俺は密かに溜め息を吐いていた。居住用テントが焼失したのは誤算だったが凶らずして住まいを手に入れたのは好都合なことには違いない。ただこれからは周りの人の目に注意しながら生活する必要があるということくらいか……色々やり辛いだろうさ。女神寮の住人のことを思い浮かべながら複雑な感情に襲われる俺。事情があるとはいえ、自分がやったことが本当に正しかったのか……とてもじゃないが判別なんかつかなかった。まあ、その時に判断してもらえばいいことか。俺は気を紛らわすように伸びをする。信念だけは曲げちゃいけないえ、俺は何者でもないただの20歳住所不定無職だ。そう自分に言い聞かせ、軽い足取りで孝士くんの待つ和室へと向かうのだった。

「……………」

とある一室から俺を見つめる怪しい視線に気づくことなく……。

第3話 奴隸、そして奉公。

ちゅんちゅん。ぴーちくぱーちく。小鳥の囀りが小気味の良い朝の目覚めを告げる。寝ぼけ眼で周りを見渡すと、以前までの環境とは全てが転換していることを思い出させる。バチバチとテンちゃん（折りたたみ式テント）を打ちつける雨音だったり、僅かな食料を奪い合い宇宙しているホームレスのオツちゃん達の罵詈雑言を聞くこともない。まさに快適過ぎる空間……楽園はここにあったんだね♡

「…お〜い孝士くん、どうやら俺たち寝過ぎたらしいぞ〜。昨日はお楽しみだったもんな〜」

俺は隣で寝ているであろう孝士くんを起こすため、布団の中から腕を伸ばしてこんもり山になっているところを揺する。だが、返つてきた反応は俺が想像していたものとは全く別物だった。

「んっ……う〜んっ、あれえ……あつ、おはよ〜♡」

「こ、ここっ……ここここ孝士くんが、女の子になつてりゆううううっ!?!」

な、何だこれ!?!ど、どうなつてやがる!?!確かに昨日寝る時までは俺の知る孝士くんそのものだったはずだ!?!なのに何で朝チュンした結果、女の子になつちやつてるんだあ!?!あれか!?!ら○ま1/2的なことなのか!?!いや、あれは確か水をかぶると女になって、お湯をかぶると男に戻るとかだったような……ってか、この色素の薄い金髪娘俺知ってるぞ!

「ちよいちよい、朝から何やつてんのよ『ドールちゃん』?」

ドールちゃんと俺が呼んだ偽孝士くんの正体はこの女神寮の住人であり、星間女子大3回生のフレイだった。因みにこのフレイという名前は源氏名らしいので、本名は知らん。コスプレが趣味らしく見かけるたびに違う衣装を着ていることから人形ドールの愛称をとって、ドールちゃんと命名した。因みに因みに昨日変な嫌がらせをしてきたきりやは赤毛ちゃん、超弩級に男が駄目なあてなはピンクちゃん、掴み所の無いせれねは不思議ちゃん、そして俺の天敵であるみねるはマッド或いはババアアアツ!!と呼ぶことにしている。まともに名前と呼ん

でるの孝士くんぐらいだな。だってあの子ぐらいだぜ？俺に危害加えてこないの。

「ん〜？えつとねえ……そうだった。私、君のこと起こしに来てあげたんだよ〜？なのに全然起きてくれないしい、寝顔見てたらなんだか私も眠たくなつちやつてえ……そしたら、一緒にぐ〜すやぴ〜しちやつたのお♪」

「えつ、何で？今日なんか早起しなきゃいかんこと、あつたつけ？」
俺が目をぱちくりさせていると、隣で寝ていたドールちゃんが布団の中から伸びた健康的な腕を俺の首にぐいっと回してきた。うわつ、何だこいつ。

「もお〜……今日は君が女神寮に来てから初めてみんな揃って食べる朝ごはんでしょ〜？だから、君が来ないとみんな朝ごはん食べられないのっ！分かったら、すぐに私を背負ってみんなのところに面白い感じで連れて行ってく」

「いやいや、ドールちゃん今の今まで人の布団で寝てたよね!?寧ろ遅くなつて叱られるべきはドールちゃんの方だよ」

俺がそう言いかけると、ドールちゃんが回していた腕に込める力が明らかに増した。ぐっ、苦しい…!?

「…あれえ？君って私たちの『奴隷』じゃありませんでしたあ？確か私たちの入っているお風呂に無理矢理侵入したり、裸で寮の中を駆け回ったり、扉をピッキングしてこじ開けたりもしましたよねえ？これって凶悪犯罪って言っても良いわよね〜。お巡りさんに教えてあげた方が良いのかしら〜？」

「喜んで背負わせて頂きます、ご主人様♡」

俺は僅かながらの抵抗すら放棄し、勢いよく立ち上がる。プライドなんて安いもんですよ、こんなの必死で守つてもね人生何も良いこと無いですから！本当に理解ある主様達で俺は幸せ者ですわ！じゃなければ今頃オツさんの射撃訓練の的になってたところですよものね！わっしよいわっしよい☆

「うふふ、やったあ〜♪んしよ…じゃあ、みんなの所までお願いね♡」
「初乗り、540円になりま〜す。5秒で到着致しますが、念のため

シートベルトをお付け下さいまし〜」

了承を得た(半ば強制的に)ドールちゃんは俺の背中によじよじと登ってくるので、誤って倒れないように若干身構える。しかし、想像していたよりも軽かったため、その心配は杞憂に終わりそうだ。懸念があるとするばドールちゃんが俺の肩に顔を乗せているので若干距離が近いことと、あと胸が背中にだいぶな感じで押し当てられているので心臓に悪いことくらいだ。あとはもう発進するのみだ……さあ、派手に決めてやろうか!

「キュカカカツ!ブオオンツ!!ブオオンツ!!パシューツ!テユルルルルル……!ブオオ……ガチャツ!ブオオオオオン!!バウン、ブオオオオンツ!!ブンボボボ、ブウンブボボボツ!!キュルルルル!パシューツ、ブオオオオンツ!!」

俺のRB26DET型エンジンが唸りをあげるぜ!このおよそ10m弱の距離の廊下をドールちゃんを背負いながら、光の速さで超ダッシュで駆け抜けていく。

「やくん、速すぎ〜♪」

背中で背負われているドールちゃんが振り落とされまいと必死に抱きついてくる。だがそんなこと気にする余裕は今の俺にはねえ!今の俺は奴隷でありマシンであり兵器だ。任務を遂行することだけを考えるんだ!

その思いを胸に女神寮を全力で駆け抜けていた俺は自分でも気付かないうちに臨界点を突破していたのだ!その結果……

「ブオオオオンツ!!テユルルル……!ブオオン!ブオオオオオンツ!!「あああああつ!!もう!何朝から暴走してるんですかつ!」っ!キュルルル……パシュー……ガチャン。お待たせ致しました、ご主人様♥目的地の談話室に到着しました♪」

朝から遠巻きにピンクちゃんから本気のお説教を受ける羽目に。なんてこった……この土地じゃ俺の衝動を受け止めるには足りなかったようだな。しゃーなしだ、チラッとドールちゃんの方を見ると、そこには何故か俺に向けて満面の笑顔を見せる彼女の姿があった。どういう意図があったにせよ、そんな顔見せられたら例え諸悪の

根源である彼女でも売るなんてこと出来ねえよな。ピンクちゃんのガチ説教、甘んじて受けるぞ……一向に視線合わせないで、壁に向かって叫んでるけど。

「……ああ、暇だっ！この時間ってマジで誰もいないのか？」

朝の騒動が収まったと思っただら女神寮の住人は大学へと向かい、孝士くんも通ってる中学とついでに買い出しに出かけてしまった。その為、現在女神寮にいるのは俺一人……人ん家とはいえ開放感が溢れてくるな。って、そんなこと言ってる場合じゃなかった。今のうちに仕事を済ましておこうか。

俺はズボンのポケットから小型の電子機器を取り出し、その中から新着メッセージを確認する。

「……おつ、来た来た。ええ〜つと……ほお、この付近のコンビニで麻薬の取引か。専門外だけど、これなら今出てつても夕方までには帰ってこれるな……うしつ、行くか！」

俺は手近にあったメモ用紙に走り書きをして書き置きを残すと、すぐに女神寮を飛び出した。そして、人通りの多い街まで出たところで不意に一台の車が俺の前で急停止した。どうやら応援が到着したらしいぜ。

「本部より応援の命令を受け参上した。取引現場までは連れて行ってやる、分かっていると思うが貴様の任務は取引の主犯及びそれに関係するメンバー全てを鎮圧することだ。そのための装備は揃っているから好きに選んでくれ」

「銃でドンパチするのは柄じゃないんだよね、ここ日本だし。とりあえずそうだなあ……この黒のレザーブーツと青のレザーパンツ貰っ

てくよ、趣味良いね」

車に乗り込むと車内の後部座席に並べられた装備一式の中から、衣装だけを選んで着替える。お生憎様、ライフルやらショットガンやらを真つ昼間からブツ放せるほど時は世紀末じゃないんでね。それに、俺は1番頼りになる武器を常に持ち歩いている。この身一つで今の今まで娑婆を歩いてきたんだ。今更、弾きなんか使えるかよ……!

「……見えてきたぞ。侵入ルートは予め端末に送信済みだ、後で確認しろ。尚、これにて我々は貴様の支援を終了するが、合図が送られ次第拘束部隊を送り込む……良い結果が聞けることを願う」

応援隊の隊長と思われる人が、ぶっきらぼうに俺に賛辞をくれる。まあ毎度のことながら助けてもらえるのはここまでだからな……しやつ! 気合い入れるかつ。

「色々助けてくれて、サンキューね。ギャラはちゃんと払ってくれよ? 遅れたら利子がつくからな。ばいちゃく☆」

俺は隊員達の熱い眼差しを背に受け、停車した車の外へ足を踏み出す。さあ、タイムリミットは晩飯の時間までか……なら、速攻でケリをつける他ねえな!

「皆さ〜ん! もうすぐ晩ごはん出来ますよ〜! そろそろ降りてきて下さ〜い」

俺は慣れた手つきで晩ごはんを用意すると、2階の自室で各々過ごしている女神寮の人たちに声を掛ける。家が焼失して父親が失踪するアクシデントを経てこの女神寮に寮母として住まわせてもらってからもうすぐ1ヶ月、漸く学校にも通えるようになってたけどだからこそ寮母としての仕事を疎かにする訳にはいかないっすから!

「おりよう？うくん、美味しそうな匂い♪いや、孝士くんがいてくれてほんと助かったわ〜♡」

いの一番に降りてきたのはみねるさんだ。いつも何かの研究をしているらしいけど、その……いつも白衣の下が裸っていうが目の毒と
いうか、非常に目のやり場に困るんだよなあ……よかった、今日はちゃんと服着てくれてるっすね。

「あつ、ごめんね孝士くん。手伝ってあげられなくて」

「ほら、せれね。晩ごはんだから頑張つて歩こうよ？」

「……無理〜」

「あら〜？私が最後かしらあ……あれ、あの人は……？」

次いであてなさん達も続々と降りてきた。最後に降りてきたフレ
イさんが何かを気にするように辺りを見回しているけど……？

「フレイさん、どうかしました？」

「ん〜？あの人はどこかな〜って思って。孝士くん、知らなくい？」

フレイさんが昨日から女神寮に住むことになった男の人のことを探しているみたいだ。そういえば、俺が帰ってきた時には誰もいなかったけど……あつ、そうだ書き置きみたいなのがテーブルの上に置いてあったんだ！

「忘れてました！俺が帰ってきたらもう書き置きがあつたんですよつ。晩ごはんまでには帰りますつて……何処に行ったかはわからないですけど」

「そお？うくん……そっかあ〜」

何だろう？一応納得したみたいだけど、フレイさんはどこか物悲し
そうな表情だ。何か用があつたのかな……？

「何処に行ったのか分からないなんて……何か事件に巻き込まれたりしてなきやいいんだけど……」

「…おんや〜？きりやちゃん、もしかして心配してるのお？あの子のこと、気になってるんだあ〜？」

ふとあの男の人の身を案じる言葉を呟いたきりやさんに対して、す
ぐさま揶揄うような発言をするみねるさん。それを受けてなのか、妙に慌てた態度で弁明を始めるきりやさんだった。

「んなっ…!?そ、そんなんじゃないよお!?ボ、ボクは単純にあの子のだからしなさを憂いてるだけで、別に深い意味は…」

「ふくん? そうなんだあ。まあ、今はそういうことにしといてあげるよ……ふっふっふっ♪」

何か意味ありげな発言をするみねるさんと顔を真っ赤にしてそれを否定するきりやさん。俺には何のことやらさっぱりだ……そうだが、皆さんが揃ったこの機会にちゃんと聞いておこうかな?

「あの、皆さんに聞いておきたいんですけど……どうしてあの人のこと、ここに住まわせてあげようと思ったんですか? ほら俺は男だから全然構わないし、てつきり流れに任せて心強いっすとか言っちゃいましたけど、あの人のことよく知らないで承諾しちゃったところもあるの」

席についたところを見計らって唐突だけど質問してみた。俺が初めて会ったのは恐らく2回目の時だったけど、あの時には既にあの人を迎え入れようっていう空気が何となく出来上がってたように思えてならない。だからその前に何かあったのかと踏んでいるんだけど……。

最初に口を開いたのは当事者であるみねるさんだ。

「そうだなあ。まあ、1番の理由は『面白そうだったから』かな? なんかよくわかんないんだけど、こうビビビッと来たんだよねえ。みんなはどうだったの?」

みねるさんが他の人たちにも話題を振る。どうやらそれぞれ思うところがあるみたいで少し黙っていたけど、1番早く考えがまとまったのかきりやさんが次いで発言をした。

「ボクは……初めて見た時からそこまで悪い印象は抱いてなかったよ。いや、勿論だけど裸で走り回ったりお風呂に乱入してきたり朝みたいに変なテンションで暴走してたり困ったところは沢山あるけど……それでも、なんかこう……『変にマジメなのかな』って……」

きりやさんが言い終わるとほぼ同じタイミングで、フレイさんがゆっくり手を挙げる。その表情はどこか晴々としていたっす。

「私は『とても楽しい人』だと思いますよお。見ている飽きないです

し、孝士くんとは違う意味で揶揄い甲斐のある反応をしてくれそうです。それにどんな無理難題を言ってもちやんとこなしてくれそうですからあ♪」

う、うむう……俺と違う揶揄い甲斐？俺相手できえスキンシップが激しい人たちなのに、あの人はもつと違うことをさせられているのか？な、なんかどんどんあの人が可哀想に思えてきたっす…。

そんなことを考えていると、せれねさんがボソツと意見を述べた。

「……アレからは、月の力を感じる」、だから近くに置いて観察し謎を解明する必要がある。それだけ」

つ、月の力？そういえば、せれねさんってこういうこと言う人だったっけ……俺にはあの人は普通に見えたけどなあ。最後はあてなさんか……この人は全く納得してなさそうだけどなあ。俺ですらかなり我慢してくれてるだろうし。

「わ、私は……まだ全然納得してないよっ。当然だけど顔見て話なんかできないし、朝みたいに奇行が目立つし何考えてるかわかんないし……みねる先輩があの人の特ント燃やしちやつたから仕方なく住んでもらってるけど、目処が立ったら出てってもらうつもりだもん！孝士くんとは、事情が違うんだから……」

あてなさんはそう言っつて、少し気まずそうにしていた。俺とは事情が違う、か……本当にそうなのかなあ？上手く言えないけど、あの人の目って俺と同じ……いやそれ以上に深い闇みたいなものを抱えている様な気がするんだよな。それを悟られないようにわざと戯けて見せたり素っ気ない態度をとったりしている……のかな？昨日の夜、話してみてもう感じた俺の感想だ。確かなことは何一つ分からないけど、それでもあの人が悪い人って思えないんだよな……。

「あはは……でも、本当はすっごく人のこと見てるんだよ。ほら最初にここに来た時、みんなの名前をフルネームで呼んでたでしょ？当然あたしは教えてないし、多分風呂場に行くまでの数秒で寮内を隅々まで見た結果なんだろうさ。誰よりも他人との接触を嫌っているはずなのに、誰よりも他人を観察している……不思議だけど、疑ったりしないであげて。時間は掛かると思うけど、いつかきつと話してくれる

と思うからさ♪」

みねるさんがどこか温かい視線を向けて、優しく語りかける。不思議とその意見には同意せざるを得ないような気がしてきた。だって俺もあの人を信じてみたいっすから！

「そうですか……すいませんっした！こんな暗い空気にしちゃって。さあ、気を取り直して食べましょう！あの人の分はちゃんと取り置きしてあるので、もうバンバン食べちゃって下さいっすー！」

場の空気を変えるために俺が仕切り直しの合図を出す。変な空気にしちゃった責任っす。せめて皆さんには寮母としてこれくらいのことばさせて下さい！それに信じてますから。皆さんならいつかきつと、あの人もやっていけるって。だって、俺を受け入れてくれた優しい皆さんですから！

「たっだいま……ああ、ちかれたちかれた」

俺はお仕事を終えて、女神寮に無事帰還した。だが、時刻は既に2時を回っており、とてもじゃないが夕飯の時間には間に合わなかったようだ。くっそ、あいつら帰りの車くらい用意しとけよ。何で行きは車で帰りは徒歩なんだよ。おかげでめっちゃ時間かかったじゃねえか。

流石にこの時間だと誰も起きてないだろうとたかを括っていた俺だったが、不意に明かりがつき誰かに声をかけられた。

「あつ……お、お帰りっ。遅かったね」

俺に声をかけたのは赤毛ちゃんだった。どういうわけか玄関入っすぐのところのところにいたようだ。俺に用……な訳ないか。

「おっす、赤毛ちゃん。どうしたこんな遅くまで起きてて……小便か

？」

「ち、違うよっ！喉が渴いたから何か飲もうと思って降りてきただけだよ！もお、女の子に向かってそういうデリカシーの無いこと言わないでよっ！全く……」

あちら、随分むくれちゃって……まあ、そういうことなら早く寝るに越したことはないだろうさ。俺のせいで目覚めが悪いなんて言われた日にや、ピンクちゃん辺りにマジで追い出されちまいそうだからな。

「ああ、そうかい。なら早く部屋戻って寝ちまいな。夜更かしは早死の元だぞー？なっはっは〜」

俺はすれ違い際に赤毛ちゃんのでこを小突くように指で軽く押す。すると、また後ろの方で声にならない声を上げながら俺の横をダツシユで通り過ぎて階段を駆け上がった部屋に戻る赤毛ちゃんの姿が……早死ってそこまで即効性ねえって。自分の将来心配し過ぎだろ……。

「単純だねえ……あつ、いけね。孝士くんに夕飯作らせてそのままだった……痛まねえうちに頂かねえとだな」

俺はすぐさま談話室に向かい、テーブルの上にラップしてあった晩ごはんをレンジでチンする。温めている間に白米をよそうことも忘れずに。こうして1人寂しく支度を終えた俺は、遅めの晩ごはんへと漸くありつけたのだった。

「……………」

「頂きます。はふっ、はぐっ……んぐっ、んんっ！うわあ……孝士くんの料理、美味ア……♡」

あまりの美味さに涙すら出てきそうになる。ってか、これ本当に孝士くんが作ったんか!?今時の中学生、レベル高すぎだろ……って、んん？背後に人の気配……この感じは、確か……。

「……あれ、不思議ちゃん？どーしたこんな遅い時間に……不思議ちゃんもメシかあ?」

視線すら合わせないまま、俺は背後に佇んでいる不思議ちゃんに声をかける。すると、何するわけでもなく階段を駆け上がったしまっ

た。俺、なんか嫌われるようなことしたっけ？ともかく気にせず食事を済ませると、それからすれ違うようにみねるが降りてきた。

「あれえ？帰ってたんだ。今せれねとすれ違ったけど、なんか随分と焦ってたよ……もしかして、君何かしたんじゃないやなろうねえ？」

「ば、馬鹿言うなつて……メシでも食いに来たんかゝつて聞いたっけだよ。そしたら何にも言わずに階段駆け上がったつちやつたんだろ。まあ、最初が最初なだけに好かれてないんだろうなあ……そういうあなたはこんな夜中にどうしたんだ？」

在らぬ疑いをかけてくるみねるに対して、すぐに弁解を試みる。全く、少し油断するとすぐこれだ……おかげでどんどん俺の立場が悪くなる一方だぜ。

「ん〜？いやあ、いつまで経つても帰つてこない誰かさんを待つてたんだよお。これでも一応当事者だからね」

「それは……悪かった。連絡のひとつくらい寄越すべきだったな」

そうか、俺のせい在这种な時間まで起きて待つてたのか……今まで1人行動が基本だったとはいえ、そこも視野に入れておくべきだった。かなり不本意ではあるが、みねるが手を回してくれたから俺は野垂れ死ぬことは回避できた節もある。今回は、俺の負けかな……

「んふふ、別に気にしてないよ♪それに研究も手詰まり気味でどうしようか考えてたところだし……ねえ君、一杯付き合つてよ」

「はあ？酒か？おい、明日も大学あるんだろ？なのに飲んだくれてて良いのかよ？」

「大丈夫大丈夫。小つちやいやつ一本だけだから……ほいつ」

そう言つて、みねるは冷蔵庫から缶チューハイ(350ml)を2本取り出し、そのうちの一本を俺に投げ渡してきた。どうやら俺に晩酌の拒否権はないらしい……まあ、今回のことは完全に俺の方に非があるので黙つて従うけど。

「ほくら、早くこつちに来なさいな。乾杯するよ〜」

みねるは談話室のソファにどっかりと座り込み、空いている隣のスペースを手でバンバン叩いている。なるほど、席の指定もするのね……しやーなしだからとことん付き合いますよつと。

俺はもはや抵抗することもなく、みねるの指示に従い隣に座る。するとみねるは急に無防備なくらいに俺との距離を詰め始め、それこそ肩が触れ合うくらいに距離まで迫ってきた。な、何のつもりだ…？

「んふふ、緊張しないのっ。あたしだって、いつつもこうじゃないんだよ？ 偶には飲んで全部忘れたいくつてこともあるんだから。ほら、缶開けて乾杯しよっ？ せくの、乾杯♡」

「…か、乾杯」

お互いの缶を突き合わせ乾杯の音頭をとると、みねるはプルタブを開けその中身を一気に飲み干すように煽る。喉が鳴る様子は豪快ながらどこか儚げな心証を抱かせる。いつものみねるとは違う、どこか別の一面を垣間見ているような気がして謎の背徳感に似た何かに襲われた。

「んくっ、んくっ…ぷはあく！ やっぱこれだよね♪ 疲れた脳に沁み渡る極上の癒し…それに今日は付き合ってくれる君もいるし♪」

「…普段は、1人なのか？」

「ん〜？ まあね…あてなちゃんときりやちゃんはまだ未成年だし、せれねちゃんは普段お酒飲まないし、大体付き合ってくれるのはフレイちゃんかな。それでも気が乗った時だけだけどね…だから今、すっごい嬉しいんだあ♡」

そう言つて俺に笑いかけるみねる。その顔は普段の常に何か画策してる悪人顔とは違って、年相応の少女の笑顔そのものだった。俺はそんなみねるの笑顔に一抹のときめきを覚えさせられるような気がして、慌てて近くの窓を開けて誤魔化す。お、落ち着け…：相手はみねるだぞ?! 俺をここに縛りつけた奴に浮いた感情なんか持つてどうする?! 冷静なれ、自分を強く持つんだ…!

すると、そんな俺の行動に不満を抱いたのか突然背後から俺の身体に腕を回すみねる。顔には出さないが内心慌てふためく俺に対して追い討ちを仕掛けてきた

「んふふ、逃がさないよお？ いつも飲めない分は、今日で精算しちゃうんだからあ…ほらほら、早く続き飲もうよお♡」

「ぐっ、みねる待て…?! そんなに身体押し当ててるなつて?! 危ねえか

ら！」

「どうやら酔ったみねるは俺をソファまで連れ戻そうとしているらしく、おぼつかない足取りで必死に引つ張ろうとしてくる。だが、またさっきのようなことになりかねないため俺もそれを了承する訳にはいかず、互いに攻防を続けていた矢先……。」

「きやつ!？」

「ぐっ……!?!?痛くッ……頭打った……お、おいみねる?大丈夫か……?」

一瞬みねるが引つ張ることを止めたことで俺の力が勝り、身体ごと床に叩きつけられてしまった。幸いにも俺が下敷きになることでみねるに怪我は無さそうだったが、俺に覆い被さる形で受け身をとったみねるの表情が次第に普通じゃないことに気づいた。

「……………」

「み、みねる……?お前、どうした……?」

俺の呼びかけに対して反応を見せないみねるだったが、次第にその顔を紅潮させていく。赤みを帯びた頬や潤んだ瞳、倒れた際に着崩れた服、月光に照らされた艶やかな唇、そして荒くなる吐息……だ、大丈夫か?」

「……………あたし、君のこと……………」

「えっ……………それって、どういう……?おい?おい、みねる?」

俺の胸に項垂れるように倒れるみねる。まさか卒倒してしまったのかと焦ったが、どうやら酔いが回って眠ってしまっただけらしい。たくっ、人騒がせな奴だぜ……このままにする訳にもいかねえし、孝士くんには悪いけど俺の布団でみねるを寝かせる他ないか。当然、俺は……………ソファだよなあ。

「おら、身体動かすぞ?1日で2人も背負う羽目になるとは思わなかったぞ……!」

俺は身体の上に覆い被さっているみねるを退かして、そのまま背負い込んで孝士くんとの共用の和室へ移動する。和室に入ると流石に孝士くんも寝てしまっているのが確認できたので、起こさないように俺の布団にみねるを寝かしつける。

その際に着崩した衣服もちやんと戻してやった。別に他意はないし、起きた時にせめて孝士くんがパニックにならないようにしてやらんとな。

「…あつ、一応寝てる時は眼鏡も外してやらなきや駄目か。間違って壊したりしたらヤバいもんな」

布団に寝かすつける際、みねるが寝返りをうっても大丈夫なように寝ているみねるから眼鏡を外してやる。よしっ、柵の上に置いておけば大丈夫だな……………なっ!?

「Zzz…むにゃ…」

……………はっ!お、落ち着け俺?!こいつはあのみねるだぞ?!たかだか眼鏡外したくらいで、何勝手にドギマギしてるんだよ!?そ、そうだ!不意を突かれただけでみねるのことなんて何とも……………くっそ、黙ってりや結構可愛いじゃねえか。あーもう、こんなの損な役回りだ!俺も酒が回って考えがバグってやがるんだ。そうだ、そうに違いねえ!こんな時はさっさと寝て忘れちまうに越したことねえ!

「…頼むから、明日にや綺麗さっぱり忘れといてくれよ?俺の脳」

俺は足早に和室を立ち去り、談話室のソファに雪崩れ込む。こんなぐちゃぐちゃな気持ちのままじゃ、まともに顔も見れなくなっちゃう。心を落ち着かせて、邪心を捨てるんだ。そうだ、そうすればきつと……………。

「うわああああああつ!!!み、みねるさん!?な、何で俺の布団に潜り込んでるんですかあ!!やつ、ちよそこ……………触らないでえええっ!」

翌朝、和室から孝士くんの悲鳴がこの談話室にまで響き渡ってくる。くっ、やはり惨劇は回避出来なかったか…!

その悲痛な叫びを聞きつけてなのか2階からピンクちゃん・赤毛ちゃん・ドルちゃん・不思議ちゃんが、和室からは半分身ぐるみ剥がされた孝士くんとみねるが談話室に逃げ込んできた。図らずして女神寮の住人が揃ってしまったらしい。だが、普段と違う光景に誰もが目を見張るようだぜ。何故なら俺が、誰よりも早く起きて朝食の準備をしていたからだ。

「皆さん、おはようございます。もうすぐ朝メシの準備が出来るので、それまで座って待っててちよ」

「これ、全部あなたが…?」

女神寮の住人が揃って驚いている中、ピンクちゃんがおずおずと俺に質問してくる。あつ、これってやつぱ勝手にやつちやマズかったか？

「あー、一応そうなんだけど…：やつぱ俺が作ったメシなんか気持ち悪くて食えない、よな…?」

ピンクちゃんの言わんとすることは理解出来るつもりだ。男が苦手で視認することすら辛い彼女に男の俺が作った料理を食べさせることは拷問に等しいはずだからだ。しかし、返ってきた言葉は俺が予想していたものとは全く別のものだった。

「あつ…：いえ、そんなことありません。寧ろ、ちよつと見直したっていうか…：みんなが言うように悪いところばかりじゃないのかなって」

「ピンクちゃん…：ありがとつ。何かよくわかんないけど、すつごい嬉しい♡」

正直言つて、意外だった。まさかピンクちゃんが俺のことを見直してくれたなんて…：俺とピンクちゃんの間になんとも言えない空気が流れる。が、それもすぐに横から乱入してきた赤毛ちゃんとドルちゃんによつて打ち砕かれた。

「あ、あぁ〜！ボク、お腹空いちやつたなあ!?!ほらつ、早く準備しようよつ。ボクも手伝うからさ!」

「あらあ〜♪なら逆にここはきりやちやんに甘えて、君は私と一緒にソファでまつたりしましよ〜♡」

「ぐはっ…!!ちよ、2人ともく!?孝士くんの前でみだりに抱きついたりしないで下さいよお!!教育に悪いじゃないですかあ!!こつちに来て下さいっ!お説教します!あなたもボケボケしてないで、すぐに料理の続きに取り掛かる!」

ピンクちゃんがえらい勢いで鼻血を噴射させながら鬼のような剣幕で赤毛ちゃんとドールちゃんを叱責して、談話室の隅っこに正座させる。立場は完全に逆転してるな…って、あれえ!?さつき焼いたはずのウインナーが消えてる!?ど、どこいった…あつ!

「……………」↑つまみ食いしている犯行現場を俺に目撃されて、ちよつとびっくりしてる不思議ちゃん。

ひよいぱく、ひよいぱくと焼き上がったウインナーを皿から一つずつ摘んで口に運ぶ不思議ちゃんとガッツリ目が合ってしまった。そして、最後のひとつを口に運ぼうとした不思議ちゃんとそれを阻止しようとする俺の必死に攻防が始まった。

「ちよちよちよ!?見られた上で食べようとするなんて、鋼のメンタル持ちか不思議ちゃん!?これ以上は駄目だつて!」

「…………その申し出、断る。どうしても止めたいなら、秘密を暴露せよ」
ひ、秘密?まさか…………俺のことバレてるのかな!?だとしたらマズい…マズいぞ!

「どうして…………月の力」、感じる?理解不能、詳しい説明を求めろ」
「…………へっ?月の力?一体何のこと?」

本気で理解できないのだけれども、そんな俺の姿が誤魔化しているように思えたのか突然俺の背中にぴよんと飛び乗ってそのままチョークスリーパーを決めてくる。うぐぐつ…………け、頸動脈がプツチンすりゆうううつ!?あつ、もう駄目…………。

「ど、どうしたんすか…………って、白目むいて気絶してるっすく!?せ、せれねさん何やったんすかあ!」

「安心して、峰打ちで済ませた」

「いやいやいや!?ガッツリ泡吹いて倒れますけど!呼吸も…………だんだんなくなってるっす!!うわあああんっ!帰ってきて下さ〜い!!!」

今日も今日とて変人だらけの女神寮の住人たち。そこに加わった

新たな住人と共にこれまでより一層騒がしく、そしてより濃密な毎日を送ることになるとは当然誰一人として思いもよらない。

第4話 改名、そして自制。

女神寮の居候生活を始めてから数日が経ったある日。それまで割とのほほんとした生活を送って来た俺を含めた住人たちに対して、それはそれは一筋の雷鳴の一撃のような緊張感が走っていた。その原因はいつものように孝士くんが中学から帰ってきた際まで遡る必要がある。とはいえ詳しい説明は省くが、それもこれも目の前の少女が深く関連している……らしい。いや、だって俺初対面だし。だからちやくんと空気読んで、部屋の隅っこで大人しくしてますよーだ。「えっと、すてあ……今日は何の用で来たんだ？俺、なんか頼んでたっけ？」

「何か用が無きや来ちや駄目なのかよ……はっ！まさか、おれにまだ隠していることとかあるんじゃないだろうな……？」

「あ、ある訳ないだろうっ！もう全部話したって！」

そう言つて、孝士くんの胸ぐらを掴み上げて詰め寄る少女。ついさつきチラツと紹介されたけど、名前は香炉野 すてあというらしい。孝士くんとは保育所からの付き合いで現在も同中（同じ中学校）らしく、所謂『幼馴染み』の間柄だとか。にしても随分とツンツンしてる子だよな……よしっ、ツン子ちゃんと名付けよう。そんなことを考えていると、ツン子ちゃんの怒りの矛先がこちらに向き始めた。

「てか、あいつ誰だよ？この前来た時にはいなかったらっ！」

「え、えっとあの人はすてあが女神寮に来た後に色々あつて住むことになった、確か名前は……」

「おい、何でそこで黙るんだよ？まさか、名前知らないとかじゃないだろうな……」

あつ、これマズい流れだ。孝士くん、めっちゃ困ってるし……あつ！お、お前から見て見ぬふりするつもりだな！？くつ、しやーなしだな……元はと言えば俺が撒いた種だ。だったらきつちりケジメつけてやるぜ！

「まあまあ、その辺にしておきなさんなツン子ちゃん。孝士くんが悪いんじゃないんで、俺には本当に名前が無いんだ。だからあまり責めな

いであげて」

俺はツン子ちゃんの肩にポンと手を乗せて、説得を試みる。が、次の瞬間には俺の鳩尾目掛けて寸分の狂いもなくツン子ちゃんのコークスクリュー・ブローが決まっていた。がはっ…!?

「勝手に触るな、変態」

「す、すてあ!?! ああ! ごめんなさい! こいつ、すぐに手が出ちやう性格で…ぐはっ!?!」

「お前も触るなっ」

必死に弁解しようとする孝士くんだったが、志半ばでツン子ちゃんの追撃をまともに食らい1発KO。男が2人揃って中学生の女子に負けた…:…なんて情けない。とまあそんなことがあってツン子ちゃんに若干の苦手意識を持ち始めた今日この頃、女神寮では「俺の呼び名」について住人会議が開催させている…:…俺抜きで。いや、絶対本人同席した方がいいんじゃないのこういう話題って? そう訴えた所で談話室から追い出された事実は変わらない訳で、誰にも相手してもらえず完全に暇を持て余した俺は、女神寮の敷地内の庭にあたる場所ので日課のトレーニングをこなすことにした。

「よしっ…:…ここをスタート地点として逆立ちのままぐるっと一周、これを合計で10回。その後は股関節の柔軟と逆立ち状態で腕立て100回だな」

その辺に落ちてあった木の枝を拾い、地面に横一線を引く。そして、軽々と逆立ちの体勢になり倒れないようバランスを保つ。体幹が重要なんだよな逆立ちって…:…それに視点の位置や腹筋も大事になつてくる。要するに腕の力に頼るんじゃなくて、全身が連動した動きを意識するのが大切ってこと。特定のニーズに応じて全身を機能させる…:…それがポテンシャルを引き出すコツであり、いつでも全力を出せるように備える準備が求められるのだ。

「ゆっくりでいい…:…少しずつでいい…:…大きな目標を成し遂げるのに必要なのは、日々積み重ねていく小さな努力! 行くぞゴラアアアツ!!」

「さて、あの子も追い出したところで……我々は大事なことを忘れてたことをみんなにも確認してもらいたい。それは………」あの子の呼び名”を決めてなかったことよ」

あたしが談話室を緊急会議の場に設定し、みんなを招集してすてあちゃんに指摘されるまで有耶無耶にし続けてきた議題を提起する。あの子曰く自分の名前は無いの一点張りだし、一向にそれ以上のことは教えてくれそうにないんだよねえ。最初の調書の件で空欄で提出してたことも未だに説明は無いし、かと言って無理に聞き出すのもなんだか気が引けるし………ってなわけで、この機会にみんなの意見と知恵を貸してもらおうっ。

「みねるちゃん……でもあの人が話してくれないと、私たちじゃどうしようもないんじゃないのお？」

フレイちゃんがあくまであの子が自発的に言う気になるまで待つべきという考えを示す。うーむ、確かにそれは真っ先に考えた。でもそれは客観的に分析した結果に基づく意見の1つでしかないのよねえ。何よりもあたしがそうしたいって思いが強いのが原因かな？

「……いや、やっぱりしてあげたいなって思ってた。みんなも知ってると思うけど、あの子ってみんなに渾名をつけて呼んでるでしょ？あの子はあたし達のことをよく知ってるのに、あたし達はそうじゃない。あの子とかあの人とかまるで他人みたいで。それってなんか……悲しいじゃん」

あたしが考えを述べると、みんなは少し黙ってしまった。やっぱり唐突過ぎたかな……？

暫く沈黙が続いた後、不意にせれねちゃんが切り出した。

「せれねは……その意見に賛成する。何故月の力を感じるのか、知り

たい……！」

お、おお……？1番最初にせれねちゃん賛成してくるなんて意外だったなあ。それを皮切りに残りの子たちも口々に賛同の意を表明し始めた。

「そ、そうだねっ！それにボクたちばかり変な渾名つけて呼ばれるのもなんか癪だもん。ボクたちも何か良い呼び名がないか考えてみようよっ」

「あらあく！それでしたら今ハマってるアニメの主人公の名前なんていかがかしら？素性の一切が不明だけど腕利きのスナイパー！確か名前は……デューク・東g」

「フ、フレイさん!?それ以上はマズいっす！何かよく分からないけど兎に角マズいっすから!!すてあ、お前も何か考えてくれよっ」

「な、何でおれがそんなこと……あんなの変態以外無いだろう。100歩譲って変態紳士とかか？」

「あ、あのっ！だったらもつと親しみやすい方が良いと思います！ほら、ゆるキャラの“く○モン”とか“せん○くん”みたいな感じではない！」

いつの間にかあたし以外のメンバーが率先して各々の意見を述べていた……なくんだ、あたしが心配しなくてもみんな受け入れてくれるんだ。何でかわからないけど、嬉しい反面ちよつと妬いちゃうなあ。

負けてられない……無性にそんな気持ちがあたしの心の中に溢れてきた。気づけばあたしはその話題の中に飛び込んでいた。

「んふふ、だったらあたしにも良いアイディアがあるんだよねえ♪まずこの白い紙に“はい”と“いいえ”とその間に鳥居を書いて、その下に数字と五十音を書くの。みんなで人差し指を十円玉の上に置いて……」

「……あの、もう一度言ってもらっていいか？今、何て言った…？」
「だから、君には2つの選択肢が残されてるの。1つは今日から君は“タオリ”を名乗るか、もうひとつは“山田”を名乗るか。さあ、男らしくビシツと決めてちよーだいっ♡」

みねるが妙にいやらしい笑みを浮かべて、俺に1枚の紙を手渡してくる。その内容に目を通してみるも、何か凄く納得いかない気がする。パツと見る限り名前の候補と思われるものが100個近く羅列してあるが、その殆どに斜線が引いてある。恐らく構想の段階で却下されたのだろうが、どれもこれも漫画やテレビドラマの登場人物みたいな珍妙な名前ばかりでほとんどと呆れてしまいそうになる。これがみねる1人だけの犯行なら巫山戯るなの一言で一蹴するつもりだったのだが、どうやらさつきから一言も俺に言葉を投げかけようとしないう女神寮の住人たち+ツン子ちゃんの静かな焦りようを見ると1枚噛んでいるらしいので、だからこそ対応に困っているわけで。中には完全に巫山戯ているのかオネエのようなミドルネーム付きのものであつていよいよ対処が必要かと思つたくらいだ。

大体俺が庭先で逆立ち歩き10周と柔軟体操含め逆立ち腕立て伏せ100回こなすのだからって相当時間かかってたはずだぞ？それだけの時間を要しても最有力候補はタオリと山田なのか!?何で!?よりによって何で今そこオ!?というか今回はブレーキ役の孝士くんも同席してたはずなのにこの結果。俺は少しガツカリだぞ……いや、寧ろ孝士くんがいたからこの程度で済んだとも考えられるな？だったらきつちり感謝せんといかんな。

「と言うか、こんなの俺に聞くまでも無く答えは決まつてるようなもんだろ？」

「そお？一応こっちでは満場一致でタオリ派だったけど」

危ねえ！あつぶねえ!!気づかず素通りしてたら俺はいつの間にかタオリの愛称を欲するがままにしていたのか!!

「ボ、ボクは反対したんだよっ!?でも、その……ひ、1人の時はす、好きに呼んでいいって、決まったから……」

赤毛ちゃんが何やら意味深なことを口走る。んっ?1人の時はって……今、そういう話じゃないの?面倒っちゃっね、この感じ……当然ながら前者は却下だ、却下!偉大過ぎて俺にはその名前は重すぎるよ。というわけで、俺の名前は今日から山田改めてダーヤマだ。日本で動き回る分には申し分ねえだろう、多分……。

「あっそ……んじゃ山田で頼むわ。もう片方のやつはサングラスかけてマイク持たされて、髪切った?」とかイグアナのモノマネとかやらされそうだし」

「オツケートじゃあ改めまして……新生「山田くん」に拍手」

みねるがツン子ちゃんを含む女神寮の住人たちに拍手を煽る。ああ、その生暖かい視線がほほほ乗り気じゃないことをビシビシと伝えてくる……お前らやっぱ適当なんじゃねえかよっ!

「よしっ、じゃあ山田くんの問題も一応解決したことだし、今度の旅行について決めよっか」

「んな適当な……はあ!り、旅行オ!い、いつの間にそんなこと……!」

みねるが突拍子もないことを口走るのを、俺は聞き逃さなかったぞ!何だそれ!俺はドタバタと足音を立てながら、テーブルの上で旅行のパンフレットを広げている女神寮のメンバー+ツン子ちゃんの元へ急いだ。

「ちよちよちよ!何がどうしてどうなってそういう話になってんのよ!?!」

「あっ……、ごめんなさいっ!みんな旅行したいって言い出したの私なんですっ!元々は孝士くとすてあちゃんが女神寮に来るようになって、もつと仲良くできないかなって考えて……イレギュラー的とはいえ、その……や、山田さんも女神寮に住むことになったので……勿論まだ苦手意識はありますけど、それでも今みたいななんとなくギスギスした感じは……やっぱりお互いにしんどいと思っただんです。相談しないで勝手に色々決めちゃって、すみませんっ!」

俺が事の経緯を尋ねると、ピンクちゃんが発起人であることを告白する。しかし、それは女神寮の住人として新たに加わった孝士くんやその友達のツン子ちゃん、そしてついであるはずの俺を含めた上で親睦を深めたいと企画を練ってくれていたのだという。大の苦手であるはずの男の俺や孝士くんの為に、自分のことを二の次にして必死に我慢してくれているのが伝わってくる。そこまでしてピンクちゃんを突き動かすものは一体何なんだろう？でも、その真摯さというか優しさだけはダイレクトに伝わってきて、どうしようもなく……嬉しかったんだ。今まで、そこまで誰かの優しさに触れたことなんか無かったからな…。

気づけば俺は嬉しさのあまり、申し訳なさそうにしているピンクちゃんの手を握っていた……超弩級の男性恐怖症であることを忘れて。

「ピンクちゃん、全然謝る必要ないって！そっかあ……いきなりだったからちよつと驚いたけど、そういうことだったら俺も大歓迎だよっ！いや、旅行かあ……そういうの初めてだから楽しみなあ！……ピンクちゃん？そんなに固まってどしたん……？」

「あっ……あああっ!?ああああのあのっ、わわわ私……ふぎゅ!」
『っ!?!』

な、なんか俺以外に緊張が走った様子が……あっ!やべっ、そういうことか!?

なんて考えが頭によぎったが時既に遅し。ピンクちゃんは極度の興奮により鼻から鮮血を撒き散らし、それは当然ながら目の前に立っている俺の顔や服やその他諸々に隈なく浴びる羽目になってしまった。俺が手を握っていたおかげ（所為）でそのまま床に倒れることはなかったが、若干痙攣して力なくふらふらと、ソファにぐったりしてしまった。

「あわわ、あわわわっ!?!ど、どうしよう!?!どうしよう!?!」

「いやいや、君も結構な事件に巻き込まれてるじよ?」

「へっ?うわあ……」

ピンクちゃんの対応に困惑していると、みねるが俺の凄惨な現状を

レポートしてくれる。運動の直後だったため白シャツ1枚のみで汚れが最小限で幸いだったのだが、露出していた腕やら首やら顔やらに満遍なく降り注いだピンクちゃんの鼻血が物悲しい事件だったことを物語っていた。

「あてなちゃんも孝士くんたちに任せて、君は先にお風呂入っちゃいなよ。どうせ服も洗濯しなきゃだしついでに身体も洗わないとねえ…♪」

「んっ、いいのか？」

「あつ、俺なら全然大丈夫っす！あてなさん復活するまで暫く時間かかると思うんで、すてあと一緒に看病してるっすから「何勝手に決めてんだこの野郎っ」ぐはっ!?う、後ろから蹴りは無しだろ……がくっ」
「ほらほら、孝士くんもこう言ってることだし♪さっさと行く行くっ」

今、完全にツン子ちゃんに打ちのめされてた気がするけど……まあ、本人が大丈夫って言ってたなら、大丈夫なのか……？

そんな思いに後ろ髪引かれつつも、流れるに風呂に入ること。まあ汗かいてたから手早くシャワー浴びて済ませようかと思つたところだったから丁度いいっちゃ丁度いいんだけどさ。

『……………ふふふ♪』

背後に聳え立つ怪しげな視線たちと思惑に気づかないまま。

「ふう……………旅行か。どうしたもんかなあ……」

俺は血で汚れた服を脱ぎ、洗濯用の籠に投げ入れる。けれども、その表情が晴れることはなかった。俺は衣服の一切を脱いでシャワーを浴び始めると、その理由について深く思考を始めた。

「何処に行くつもりなのかは知らないけど、その間は請け負えなくなるか。まだ手持ちがいくらあるから大丈夫とはいえ、その期間の収益が見込めないわけだな…」

壁に手を付き頭からシャワーヘッドから出る湯をかぶる。滴る温水が俺の中の余計な考えや不安を流し尽くしてくれるような気がする。雑念を振り払えば自ずとどうすればいいのか見えてくる…遠い昔にそう教えられたことを思い出す。それは鏡越しに見える俺の背中に深く刻まれた一筋の傷跡と非常に深い関係があるのだけれど、今はその話はよしておこう。俺もあんまり思い出したくないことだ。

俺はシャワーを止めて、そのまま浴槽に浸かる。この瞬間だけはあらゆる束縛から解放されて、沈んだ気持ちも穏やかになる。

「はあ……すっげえ気持ちいいや…」

「あらあゝ、たしかにとつてもいい湯加減ですわあ♡」

「だよなあ……んんっ!?ド、ドドドロールちゃん!?何でここに…?!」

湯に浸かって全身が弛緩するほど浴びてやろうと意気込んでいたら、いつの間にか背後に迫っていたロールちゃんが俺に同調してきた。恥ずかしいとか関係なく今のはマジでビビったぞ…!

「えつとお、一応さつき声は掛けたんですけど…返事が無かったのに入っちゃいましたっ♡」

「さ、さいですか…でも、俺入ってるの知ってたよねえ?ロールちゃんって意外と大胆なのね…駄目よ、そういうことしちゃ」

「むう…山田くん!さつきからどうしてこつち見て話してくれないの?ほらっ、こつち向いてよっ」

「ええ!?や、それマズいって…ああゝっ!駄目だつて…!」

後ろから腕を回され強引にロールちゃんの方に向き直される俺。

ああ、これで俺も立派な罪人だぜ……って、あれ?

「んふふ、そんなに慌てなくても大丈夫ですよ。ちやくんと水着つけてますから♪それよりこの水着、どうですかあ?」

ロールちゃんは黒のビキニタイプの水着をつけていて、どうやら知らずに焦っていたのは俺だけだったらしい。というか、薄々気づいて

はいたけど……改めて見るとドールちゃんってスタイル良いよな。出るべきところはちゃんと出て締まるところはきっちり締まってる。趣味のコスプレの為なのか無駄な肉がある部分を除いてほとんど無いこともある意味努力の賜物なのかもしれない……って、いかんいかん！そんなことを聞かれてるんじゃないよな。

「えつと……凄く、似合ってる……と思う？いや、似合ってるよ！」
「……褒めてくれるのは嬉しいですけど、おっぱい見つめながら言われても素直に喜べないですつ。顔に似合わずエッチなんですわねつ。そんなに気になるなら……触ってみます？」

俺の返答に初めは不満気或いは複雑な反応を示していたドールちゃんだったが、何か閃いたのか急に意地の悪い笑みを浮かべて俺を誘惑してきた。だ、駄目だぞ!?そんなことをしたら俺は一生を刑務所で過ごす羽目になる！だが……1人の男として考えればドールちゃんはとても魅力的な女性であることは間違いない。その当人が触りますかと尋ねているんだぞ？逆に言えば、触らない方が失礼という意見も一理ある。俺は……どうすればいいんだああああ!!

「あのお、それで結局どうしますう？」
「……ちよつと待って、今考え中っ」

「むう……別にいいですけどお。ほらほら、こんなにぶるんぶるんですよお♪飛び込んで来てもいいんですよお♪」

「はうっ!?そ、その両手を添えて揺らすやつ止めて……すっごい悪魔的な誘惑だから、それ。ああ、触るか触らないか!」

気を抜けば今すぐにでもかぶりついてしまいたいほど魅力的なドールちゃん。だが、良いのか俺の理性！確かに目の前には理想郷が存在するだろう。しかしそれは本来、無償で到達してはいけない領域であることに変わりはない。人はそこに至るべく出来るだけの努力を積み重ね最善を尽くした結果、その高みへ到達出来るのだ。しかし、人間の悲しい性なのかその努力無くして結果を得たいと思う悪しき考えが混在することも事実。気づけば俺はゆっくりと、だが確実に両手をドールちゃん目掛けて突き出し始めていた。やはり欲には勝てないのか……!

「んふふ♪やつとその気になったんですね……いいよ、山田くんなら……」

何処か妖艶な笑みを浮かべているドールちゃん。その目には既に受け入れる意思が表れているように見えた。ごめん、ドールちゃん……俺は、俺は……！

「俺は……何間違ってたんだよ馬鹿野郎オオオオツ!!」

俺はドールちゃんに迫っていた手を直前で止め、そのまま自分の顔面にグーパンチを右手左手合わせて2発分炸裂させる。突然の俺の狂行に驚くドールちゃんだったが、おかげで最悪の一步手前のごころで踏み留まることができたようだぜえ……！

「や、山田くん!?いきなり自分の顔……ええ!?」

「ぐぼつ?!?あう……口ん中切った……でも、これでやつと目覚めたぜ。ドールちゃん、大人の男を舐めたらあかんぜ……一時の快樂に身を委ねて破滅するほど柔じゃねえ……くっ、くくうく……!」

「山田くん……偉いつ!欲望に打ち勝つなんて中々出来ることじゃないよつ……頑張つて我慢出来たから、ご褒美ね♡」

触りたい欲を死ぬほど我慢した俺に、ドールちゃんから不意打ちのキスが……!」

「……そこは、ほっぺなのね」

「んふふ、とーぜんだよつ。そこは本当に好きな人のために大事にとっておくのですっ♡」

ドールちゃんに完全に翻弄されてしまった。くっそお……そんなんされたら惚れるしかねえじゃんかよお!!こちららバツキバキの童貞野郎なんだからよおおおつ!!あああああつ!!くそくそくつそ!俺の脆弱な精神よ、今すぐ消え去れえええつ!!心を燃やせエエツ!!

「シャオラアアアアツ!!行くぞゴラアアアアアツ!!」

「へっ……?わっ!?!」

俺は自分への鼓舞と自責の念に駆られ勢い良く立ち上がると、その勢いのまま風呂場を飛び出していった。このままじゃ駄目だ!つい先日不覚にもみねるにときめいてしまおうし、今日だって嬉しさのあま

り男性恐怖症のピンクちゃんの手を握ってしまおうし、今度はドールちゃんに惚れそうになつてしまおうし。俺自身、脆弱な自分から生まれ変わる必要があるんだ……旅行決行までに。

「行っちゃった……んふふ、意外と男らしくったなあ♪中身も『それ以外』も♡」

「…………ヤベエ、完全に眠れなくなつちまつた。いよいよ明日だぞ、旅行……夜風にでもあたるか」

そうこうしている間にとうとう旅行が明日に迫つてしまい、俺の心の中のざわざわが治まらないでいた。結局、旅行先や内容については一切触れないでいたので、内心不安で仕方がない。その間俺は何をしてたかという……筋トレ？不安や焦りを活気に日夜筋トレに励んでいたな。その成果なのかひもじい思いでホームレス生活してた頃に比べれば、その体躯の屈強さは歴然だろう。悲しいかな……んっ？どうやら先約がいるらしいぞ。

「こんな夜中まで起きてちゃ駄目じゃないか、不思議ちゃん」

「山田……お前に言われたくない」

談話室に入ると窓を開けて床に座りながら何かを眺めている不思議ちゃん姿があった。名前を呼んでくれるようになったのはいいけど、未だにドライな対応をされるのは俺の努力不足かな。だから、この機会に色々話して不思議ちゃんと打ち解けられるよう頑張ってみようと思う。

「ははっ、そりやそうか。まあそれはそれとして……何眺めてたん？」

俺が質問すると、不思議ちゃんは眺めているものから視線を外さずにゆつくりと指さして教えてくれた。

「あれは……月？本当に不思議ちゃんは月が好きなんだねえ」

「…月はせれねの力の源。その加護があればせれねはいつでも安心……でも、明日の旅行の前に煩わせてしまった」

そう言つて、少し悲しそうな表情を見せる不思議ちゃん。その騒動のことはさつき寝る前の孝士くんから聞いたばかりだ。大学と女神寮の往復しかしてこなかった為に遠出するのが不安だった不思議ちゃんの為に、女神寮の住人たちが各々月に関連する物をプレゼントしたらしい。結局、ピンクちゃんが買ってきた内側に月のプリントが施されてる傘と孝士くんが補修した普段着の体操服が決め手になつたらしいが……あれ、何もしてないの俺だけか？そりゃ対応がドライになる訳だ。しゃーなしだな……とつておきを出すか。

俺は不思議ちゃんの隣に座り込むと、今まで秘めていたとつておきの話を披露することにした。

「よつと……でも、みんなは不思議ちゃんのこと好きだからそこまでしてくれるんじゃない？勿論、その中には俺も含めてだけど」

「山田のは信じられない」

俺の言葉を即座に否定する不思議ちゃん。ぷいって首を横に振る仕草が小動物みたいで何か可愛らしくすら思える。おっと、脱線しそうになった。

「本当にい？じゃあひとつだけ面白い話してあげる。そしたら俺の言うことも少しは信じてくれる？」

「……内容によりけり」

淡白に答えながらも、どこかウズウズしてる様子の不思議ちゃん。ふふふつ、これは相当びつくりするぞ〜？

「実は俺、月に行ったことがある」

「……………」

「…………いや、無言はやめてよ。えつ、興味ない感じ？月だよ、月！ムーン！」

折角今まで内緒にしてきた秘密の1つを暴露したのに、疑いの眼差しを向ける不思議ちゃん。何なら真っ先に飛びつくと思っただけどなあ…。

「嘘はよくない。仮に事実なら大ニュースになる」

「んっ……まあ、そりやそうなんだけど。でも本当のことだし……あつ、じゃあさつき月を見てたって言ったろ？だったら分かると思うんだけど、あのクレーターの横あたりに施設があるの見えるだろ？」

「……見えない」

必死に目を凝らして見ようとする不思議ちゃん。はははっ！そりやそうだ。だってそれ専用の超長距離監視用の双眼鏡でなきゃ視認できる訳ないもの。俺は服のポケットからその小型双眼鏡を取り出して、不思議ちゃんに手渡して月を覗いてみるように促す。

「倍率は合ってると思うから、まずそのまま覗き込んでみて。多分デツカいクレーターが見えるでしょ？それは見えた？」

「……見えた。その施設は右側？左側？」

「ええ〜つとね、確か……右側！白っぽいやつがあると思うんだ」

「……あつた。何か文字みたいなのが見える」

「多分こう書いてあるはずだ……ス〇ルムンって」

「……合ってる。何で……？」

不思議ちゃんが驚愕の表情で俺に向き直す。漸く信じてくれたみたいね……長かった〜。

「だからさつきから言ってるでしょ。俺は月に行ったことあんの……非公式にだけけど。だから今後は俺のことを信用して……って、どうしたん？急に目えキラキラさせて」

「月の話、もつと教えて」

さつきまでのドライさとは打って変わって、ずいっと俺に近づいてくる不思議ちゃん。そこまで月の話のストックないんだけど……まあ、気が済むまで語り明かすか！

「よ、よくし分かった！じゃあお耳汚しに、さつきのス〇ルムン基地の裏側に螺〇城っていうデツカい城があつてな……その周りを人間が将来的に宇宙空間でも住めるように作られた大規模な大型宇宙ステーション「ス〇ースコ〇ニー」ってのがゴロゴロ設置されてたな……」

その結果……翌日の朝。

「よし、それじゃあ出発するよ……って、山田くん何でそんなに顔白いの!?! 生气抜けてない!?!」

「山田、平気。気にせず行こうっ」

「えっ、何でせれねちゃんか返事してるの? ってか、何で隣の席確保してるの!?! な、何があつたつて言うのよ!?!」

とりあえず不思議ちゃんには一応気に入ってもらえたみたいだ。そのかわり暫く不思議ちゃんの前で月の話はやめようと思った。だって、際限無く聞いてくるんだもん…。

第5話 旅行、そして遭遇。

「ほお、こりやまた随分と雰囲気のあるお宿なこと……2、3人は出るかな、きつと」

「あうく!?ご、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい!?私が似た名前の所と間違つて予約しちゃったみたいですよ……」

宿に着いて早々、ピンクちゃんがひたすら平謝りしている。移動中は昨夜の不思議ちゃんとの必死の攻防の所為で半分魂抜けてた俺だったが、漸く復活した所でこの騒ぎだ。まあ、俺としては屋根さえ有れば何処でも寝れるからあまり大差ないんだけどな。

「まあまあ、落ち込まないで、あてなちゃん! 実質貸切みたいなものだし、それに周りも静かで涼しいし避暑にはもってこいじゃない♪」
「うう……フレイ先輩!!」

あらら、ドールちゃんとピンクちゃんが抱き合つてらあ。このくつそ暑い中よくやるわ……んっ? このタイミングで連絡……? 誰からだ…。

「あ、あはは……とりあえず荷物も先に預けたことだしどうしようか? さつき話してた通りチェックインまで周辺散策する?」

「うくん、そうだねえ……確かにあの旅館も“出そう”な雰囲気だったし、この辺を調べとくのもいいかもしれないね? どうせ後で肝試しやる予定だし」

「ええ!? そ、そんな話、聞いてないよ……?」

「あれ、言つてなかつたっけ? あつ、フレイちゃんと車の中で盛り上がったただけか! 特に苦手じゃなければみんなでやろっかなって。孝士くんとかはどお?」

「俺すか? まあ、普通につて感じっすかね……すてあの方がそういうの得意かもしれないっす」

「ああ、むしろ好きだ」

「そ、そうなんだ……じ、じゃあやつぱり、やるんだね……そっか……」
「きりやちゃん、もしかして……怖い?」

「そ、そそそそんにやこにやいよおお!?……うわっ!」バシャーン

!!

「き、きりやさんっ!!おわああ!?」「バシャーン!!

「こ、孝士!!」バシャーン!!

「あちやう、やっちゃったねえ。ずぶ濡れのままだと風邪引いちやうから、早めにお風呂もらおつか!……あれ、山田くんは?」

「はあ……はあ……こ、ここまで来れば大丈夫か?それよりさっきのメッセージ、これって冗談だろ?」

俺は女神寮の住人たちに悟られないようにその場を離れ、ついさっき届いたメッセージを確認する。そこには俺にとって切っても切れない深い関係にある報告があがっていた。

「復活、したのか……しかも日本まで追ってきてると。厄介なことになるそうだな……っ、誰だ!?!」

不意にどこからか俺を監視するような鋭い視線を感じ、辺りを見渡す。しかし、返答は無く……代わりに別の方向から赤毛ちゃんが姿を現した。何故か全身ずぶ濡れの状態で……何で?

「あつ、こんなところにいたんだ!急にいなくなっちゃったから、探してたんだよ。何かあったの?」

「……あく、いや最近トイレが近くて。旅館まで間に合わなさそうだったから、茂みの陰で小便してた」

「なっ……!?も、もお〜!だからそういうこと言うのやめてっばっ!?!本当にデリカシー無いんだからあ……」

赤毛ちゃん、ごめん……でも、こればかりは本当のこと言うわけにはいかんのよ。幻滅されようが、こういう振る舞い方しか出来ないのは俺の実力不足だね……プロはもつと上手にやるって聞くもんな。

「とにかく見つかったよ。みんなも探してるだろうから連絡しておかないやだ」「おい赤毛ちゃん。そのままじゃ風邪引くから、これ着てろ」へっ……うわっ！」

発見の連絡をしようとスマホを取り出した赤毛ちゃんに、俺は着ていた上着のシャツを頭に掛けてあげる。

「何でずぶ濡れなのかは知らんけど、ちゃんと服は着ていた方がいいぞ？ 水に濡れたからなのか、下着が透けたり浮き出たりしてるからさ」

「っ!? え、えっち……!」

おいおい、そりや無理があるでしょよ。そんな薄くい格好しといて……なるべく直視しないようにはしてたけど、本人的にはもう俺に指摘された時点でアウトなんですよ？

「えっち……っって言われてもなあ。まあ赤毛ちゃんが俺に視姦されたって訴えたら、まず間違いなく俺勝てないだろうし」

「そ、そんなことしないよお……それに上着貸してくれたの、嬉しかったし……」

そう呟いて、俺の上着を胸の前でギュツと抱き締める赤毛ちゃん。いや、持っていないで早く着てほしいんだけど……。

「あー、はいはい。もう分かったから、さっさと連絡なり何なりしてちよ。旅行中は借りっぱでも全然いいからさ」

「む、むう……何か釈然としないなあ。分かったよ……ほら、早く旅館に戻ろっ」

「ええ? おお……!」

俺の上着を羽織った赤毛ちゃんは急に俺の手を引いて駆け出した。その表情は一見不満気ながらもどこか嬉しそうで、俺まで釣られて自然と笑みが溢れてしまう。さっき感じたアレはきつと俺の勘違い……なんだろうか？

「ふいふ、いい湯だったなあ。温泉最高オ♡……って、お前ら人の布団で何してやがる?」

宿の飯を食べて温泉に浸かって部屋に戻ってきたら、既に俺の布団はみねるやドールちゃんたちに占領されていた。布団の隣に孝士くんを盾として常駐させておいたのだけど、その守りは容易く突破されてしまったようだぜ。

「ん〜? いやあ、さっきお風呂入ってる時に孝士くんが、寂しいから夜はみんなと一緒に寝たいですう〜」って柵の向こうから細かい声でお願いするからあ……ねっ?」

「ねっ? じゃないですよ! 俺、ちゃんと断ったじゃないっすかあ!?! それなのに強引に押し掛けてきて……」

「……なるほど、孝士くんが必死に何とかしようとしてくれたのは伝わったよ。正直みねるやドールちゃん辺りは予想してたから驚かないけど、まさか赤毛ちゃんやら不思議ちゃんまでそっち側に乗るとは思わなかったよ」

俺はそう言っつて、普段はどちらかと言えばブレーキ役の2人に視線を移す。俺に睨まれて見るからに動揺する赤毛ちゃんと、逆に無を貫いている不思議ちゃん。おかしいなあ、普段はそういう悪ふざけに参加しない子だと思っただけだ……。

そんな俺の考えが伝わったのか、俺の布団の中で芋虫状態だったみねるが俺を手招きして近くに呼び寄せた。一体どんな言い訳をするのやら……?

「(本当はね、肝試ししようって話だったんだけど……きりやちゃん、本気で怖がつちやつてさ。だから部屋も一緒にした方が、少しは安心出来るかなって……勝手に決めちゃってごめんねっ)」

そう言っつて、少しバツが悪そうにウインクするみねる。そういうことだったのか……あくまで悪ふざけという形でみんなを巻き込んだのは、誰にも後腐れなくするため。自分が発起人として矢面に立つこ

とで、呵責が発生しないようにしたのか……悪いやつだぜ。

俺はみねるの額を指で小突くと、微笑みながら答えてやる。

「バクカ、だからってみねるだけが我慢することないだろ？そういうことなら全然構わないよ……だから、自分だけで背負い過ぎるなよ？」

「っ！う、うん……ごめん。なはは、ちよつと熱くなってきちゃったかな！よしっ、あたしもう一回お風呂入ってくるよ！その……ありがとね、気に掛けてくれて……」

そう言つて、そそくさと部屋を出て行くみねる。ほのかに頬が紅潮していたように見えたのは、俺の気のせいだろうか……うおっ!?

「山田くんも、中々隅に置けませんわね。みねるちゃん相手にあそこまで有利に立ち回るなんて♪」

「むう……それ、ボクにもやったのにつ。山田くんつては本当に節操ないんだからあ」

「山田……月の話、続き聞かせて」

いつの間にかドールちゃん、赤毛ちゃん、そして不思議ちゃんが眼前に迫ってきていた。な、何だお前ら!?!孝士くん目当てで部屋占領してたくせによお！俺が認めた瞬間に手のひら返しやがって、調子の良い奴らだぜ。

「ちよ、お前ら一遍に来るなあ!?!3対1なんて卑怯だぞこの野郎！1人ずつ相手しやがれええ!!あつ！こ、孝士くんたち？何で急に俺から距離を取る!?!いや、ちよ……離れるなつて！」

明らかに俺（の周辺）を危険地帯と認識したのか、ピンクちゃんが率先して孝士くんとツン子ちゃんを俺から引き離そうとしていた。いや、このタイミングでそれは困るつて!?!俺だけじゃ手に負えんのだからせめて見守つてて！あつ！逃げたなこの野郎っ!?!

①ドールちゃんの場合

「山田くん……折角同じ部屋になったんだから、この際同じ布団で寝ようよお？ねっ、お願いい♡」

「お願い♡じゃなくて、その前に浴衣を着崩してるの直してくれよ……胸元開け過ぎだから」

「やくん、えっちゅ♡」

も、もうやだ……ドールちゃんと同じや話が一向に進む気配が無い。あと、すつごい赤毛ちゃんが悔しそうな表情でこっちを見てるのってどういう心境なの？あつ、部屋の外に連れて行かれた。グツジョブだぜ、不思議ちゃん。

「もう……この前のもそうだけど、ドールちゃんって俺のことどう思ってるのよ？」

「え〜？勿論、好きですよ♡」

何の躊躇いもなくそう口にするドールちゃん。そういうことじゃないんだけどなあ……分からせなきや駄目か。例え嫌われる羽目になっても！

「そうじゃなくて……俺のこと、異性として見れるかってこと。その辺どうなの？」

「……へっ!?あ、あのそれどういう……」

俺が追及すると、ここにきて急に慌て始めるドールちゃん。ようやくと事の重大さを理解し始めたか……だがこのまま終わらせる訳にはいかなねえな。責任は在るべきところにきつちり還す！

俺は両手で正面からドールちゃんの肩を掴み、真面目なトーンで真摯にドールちゃんだけに聞こえるよう耳打ちして告げた。

「だから、同じ布団で寝るとか俺のこと好きって言ってみるのとかって本気なの？それとも俺のこと揶揄ってるだけ？もし冗談でやってるなら……今すぐ止めてほしい」

「……っ！あ、あの……わ、私は……」

今までにないくらい動揺しているドールちゃん。厳しいこと言ってるかもしれないけど、本気で命に関わることだから有耶無耶にする訳にはいかないんだ。ただ、今のでドールちゃんも考え方を改めてくれるきっかけになったはずだと思うことにしたい。理由は言えないけど、俺と関わる以上「普通」の基準は通用しないんだ……。

俺はドールちゃんの動揺ぶりを見かねて、助け舟を出すことにし

た。せめて教訓と思ってくれれば、俺のことをどれだけ嫌おうと構わないからな。

「……ふふふ、なくんてね。びっくりした？ いつもドールちゃんが俺のこと揶揄うから、仕返ししちゃった♪ 純粹な孝士くん相手ならまだしも、童貞無職の俺にそのイジりはしちゃ駄目だよ。本気かどうか判断できないんだから……分かった？」

俺はついさっきまでの冷淡な表情から一転、戯けた態度でドールちゃんに語りかける。むっ、反応がない……マジ責めし過ぎたか？ リカバーせんといかん。

「おい、ドールちゃん？ ごめん、ごめんって!? そんな本気でビビっちゃうとは思わなかったから……ほら、よくしよし怖くないぞー」

俺は少し乱暴にドールちゃんの頭を撫で回す。わしやわしやわしやくつ！ すると俺の猛攻に耐え切れなくなったのか、遂に我慢の限界を超えたかのように嘔き出したドールちゃん。

「……っ、ふふ、くっ……ぷっ、あはははっ！ も、もうわかりましたからやめて下さい！ くすぐりたいですから〜！」

堪えきれず俺に降参の意を示すドールちゃん。その表情はさっきまでの深刻な動揺ぶりは消え、どこか晴れやかな笑顔だった。だが止めんよ？ この際ドールちゃんにはその行き過ぎた悪戯精神をしつかり矯正してやるんだっ。

「いーや、駄目だ。こんなのまだまだ序の口だからね……足腰立たなくしてやる」

「はふう……へっ？ いや、ちよつと待って山田くん？ その手はどうするつもりなのお……？ あの……だ、駄目だよ？ 私、くすぐり弱いんだから……っ！ きゃーっ！」

ふっふっふ、お仕置きの間だぜえ。俺特製のくすぐり拷問地獄をお見舞いしてやる……何分で正気を失うか我慢比べといこうかあ！！

② 不思議ちゃんの場合

「フレイ、撃沈してた。山田、お前何をした？」

「ええーつとですね……いい、言えませんつ」

あつぶねえ！もう少しで事案になるところだったく！俺のくすぐり拷問地獄フルコースを受けものの5分で完堕ちしたドールちゃんの悲鳴を聞きつけ、不思議ちゃんと赤毛ちゃんが駆けつけてきた。孝士くんたちはそもそもこつちに来る気は無いらしい。災難に巻き込まれたくないという強い意志が感じられる……懸命だよ、出来れば俺もそつち側にいたかったさ。とりあえず撃沈したドールちゃんを赤毛ちゃんが背負って元の部屋に運び、不思議ちゃんが俺に尋問するってのが現在の状況だ。

「むっ、何故言えない？やましいことがあるのか？」

「いやあ……本人の尊厳と名誉の為としか」

「……そうか、なら後でフレイに直接確認するからいい。それより山田、お前に協力を要請したいことがある」

「……協力？それってどんな？」

いつにも増して真面目な顔で俺にそう言ってくる不思議ちゃん。不思議ちゃんが俺に何か手伝わせるなんて珍しいねえ……？

「この旅館を中心に時空の歪みを探知した。せれねが到着した際はごく小さなものだったが、刻を追うごとにその歪みが広がっている。今夜、その調査をする予定……だから山田、お前も同行してほしい。月の真実を知る人間の1人として」

「……ふくん、そうなんだ。でもそれ俺じゃないと駄目け？どうせ明日海行くんしよ？だったらそれまでに日頃消費し続けた英気を養うのに時間を使いたいんだけど……」

「……もし断ったら、山田がフレイに残虐非道の限りを尽くして凌辱したと言いふらす」

「ちよ！？それは無いだろ不思議ちゃん！？事実無根だ！話題の摺り替えにも程があるぞっ！！」

「勿論、それは分かっている。フレイ、何故かすごく幸せそうな顔をしていたから。でも他の者はせれねの言葉を信じる、それ故山田に選択権は無い」

ぐっ……不思議ちゃん、汚ねえ真似しやがってえ！実質これ脅迫じゃねえか！だがしかし、不思議ちゃんの言葉には信憑性があるからなあ……こういう場合、加害者よりも被害者の証言が信用される傾向があるし……黙って従う他ねえか…？

「……はあく、分かったよ。有る事無い事言いふらされても困るのは俺だけだしな……喜んで協力させて頂きますよ、ご主人様♡」

「……そう。なら他の者が寝静まったのを見計らって起こしに行く。それまで待機せよ……ふふっ♪」

そう言つて、そそくさと部屋を出て行く不思議ちゃん。去り際にちよつとだけ笑っているように見えたのは俺の気のせい、なのか…？分からん、余計に分からなくなつたぞ不思議ちゃんという人間が。何はともあれ、俺の今夜の安眠の予定は不思議ちゃんという突然の来訪者によつて、無残にも崩壊したという……目的の為ならどんな手段も厭わない。恐るべし、不思議ちゃん……！

③赤毛ちゃんの場合

「ちよつと山田くん！君、一体何をしたのさっ!? 2人とも何ていうか……そう、どこかフワフワした感じになつちやつてるじゃないか！詳しい説明を求めるよっ、ボクは！」

不思議ちゃんが帰るなり、恐らくすれ違いで俺の所まで走って駆け込んできた赤毛ちゃん。そんなにドタドタ迫つて来なくても……

「いやだから不思議ちゃんにも一応説明したけど、本当に何も無いんだって。信じてくれんかもしれないけどさ……」

「……っ、別に信じてない……訳じゃないけど……で、でも君と話してから2人の様子が変わったのは事実だもん！絶対そこで何かあったと思うんだけど……どうしても、話せないことなの……?」

赤毛ちゃんが不安げに確認してくる。そこにはいつもの凜々しい姿はなく、ただ1人の女の子がいるだけだった。そこで俺は自分の中に何か別の思いがあることに気づく。それはいつの日か心の奥底に仕舞い込んでいた根本にある光……本来の優しさとも言えるのかも

しれない。その思いが目の前で不安がっている赤毛ちゃんをこのままにするなど強く警告を出していた。

気づけば俺は自然と口が開いて、2人にしたことの説明を始めていた。

「……分かったよ。じゃあ正直に話すけど、本当に大したことじゃないんだ。まずドールちゃんには俺とか孝士くんに対して少し過激な悪戯をしてくるから、本当に好きな人だけにそういうことをするべきだってちよつとキツくお説教じみたことしちゃったの。その時お仕置きとしてくすぐり攻撃しちゃったから、流石に堪えるまでやったのはやり過ぎたかなって反省してるし後でちゃんと謝りに行くこうかなって思ってるよ」

「…っ！ふ、ふくん……せれねには、どんなことしたの?」

「えつと、不思議ちゃんには深夜のデートに誘われ……痛っ！痛い痛い!ちよ、赤毛ちゃん叩かないで!もう巫山戯ないからっ!」

あう……ちよつと脚色したくらいでいきなり叩いてきやがって。まあ何の脈絡もなくボケた俺も悪いけど……ちよつとくらい夢見てもいいじゃんかよ!

「もおーちゃんと答えてよおー!山田くんのことを疑ってる訳じゃないんだから、そこで変なボケとかやめてよっ」

「わ、悪かったよ。まさかそこまで突っ込まれるとは……本当は何かの調査に同行してくれて頼まれたんだよ。多分だけど霊的なやつだろ」

「っ!?ま、まさかじゃないけど……い、いるの?ここに?」

俺の言葉を聞いて明らかに顔が青ざめる赤毛ちゃん。もしかして、苦手なのか……霊的なやつ。ちよつとカマかけてみるか。

「……ああ、だってほら……今も赤毛ちゃんの後ろにいるじゃないかあ……!」 「きやああああつ!」 うごっ!」

俺が必死に稲川○二ばりの恐怖の顔と声色を作って凄んで見せると、何をとち狂ったのか俺に向かってタツクルしてきた赤毛ちゃん。その躊躇いのなさ、良しだぞ……っ!

「はあ、はあ……あつ!ご、ごめんっ!だっていきなり怖いこと言うか

「らあ……君がいけないんだよっ!？」

「うぐう……へっへっへっ。そうかそうか、赤毛ちゃんはオバケが怖いのかあ。知らなかったなあ。♪」

俺がいやらしい笑みを浮かべながらそう言うと、ビクツと肩を震わせながら冷や汗をかく赤毛ちゃん。良いことを聞いちやっただぞ。

「そ、そそそそんなこと、あるわけないで「あつ、赤毛ちゃんの両肩に血塗れた霊の手が……」うわああああつ!も、もう勘弁してよお……」

すっかり涙目になってそのまま俺の身体にしがみつくと赤毛ちゃん。はっはっはっ!大勝利なり!さあ、お巫山戯もこれくらいにしておこうか。

「ほらほら赤毛ちゃん、大丈夫だから顔上げてよ。もう揶揄ったりしないからさ」

「本当お……もう虐めない……?」

「……っ!あ、ああ……勿論だぜ!」

「みんなにボクが怖がりなの言いふらしたりしない……?」

「そ、そんなことしないっ。や、約束する……」

「ボクが幽霊に襲われたら……守ってくれる?」

「あ、ああ……なるべく守ってや……なるべく?」いや、絶対!どんな状況でも駆けつけて守ってやる!絶対の絶対だっ!」

すっかりしおらしくなった赤毛ちゃんが上目遣いで俺に力なく聞いてくる。な、何だこれ……可愛すぎるだろオ!?!普段どんな時でもキラツとしてる赤毛ちゃんからは考えられないくらい乙女な表情で、しかも俺の浴衣を放さないようにギュツと握りしめて……これがジャパニーズカルチャー「ギャップ萌え」ってやつか!?

「……そっかあ!じゃあ許してあげるっ!もお……女の子を揶揄うなんて、山田くんは本当に子どもだなあ。ふふっ♪」

「お、おお……そうだな。じゃあ、とりあえずみんなのいる部屋に戻るか?」

「そ、そうだね……あつ、ちよっと待って」

何となく気まずい雰囲気を感じみんなの所に戻ることを提案すると、それを了承した赤毛ちゃん。そして、そのまま立ち上がると不意

に俺の右腕に抱きついてきた。な、何のつもりだ…!?

「あ、赤毛ちゃん!?あの、これはどういう…」

「…だって、こうしてないとすっごく怖いんだもんっ。みんなのいる部屋までで良いから、それまでこうさせてよっ…山田くんは嫌…なの?」

「俺は別に…赤毛ちゃんの気が紛れるなら、そうしてても構わないけど」

「…ふふふ、ありがとっ。山田くんって、意外と優しいんだね…じゃあ、行こっか♪」

そう言っつて、部屋から出て廊下を歩き始める俺たち。言えない…右腕に赤毛ちゃんの慎ましいながらも自己主張を忘れてない胸の感触が確かにあるなんてこと、間違つても口にする訳にはいかない!それを口にすれば最後、今まで積み上げてきた信頼関係が一気に崩壊してしまうことに!大丈夫、落ち着け…今思考が定まってないのは赤毛ちゃんの胸の所為なんかじゃないし、妙に近い距離で香ってくる赤毛ちゃん髪の毛のいい匂いで鼻先が刺激されて動悸がおさまらないわけでもない!俺は普通だ、これで平常運転なんだっ!よくし、そう考えれば視界がクリアになってきたな…んっ、赤毛ちゃんの奴。怖くて左腕にも抱きついてきたのか?こりや本物の怖がりさんだな…ちよつくら安心させてやるか。

「赤毛ちゃん、そんなに怖がらなくても何処にも行かないよ。だから左腕まで掴むのやめてよ」

「…えっ?ボク、右腕にしか捕まってるだけだよ?両腕でこうして抱きついてるんだから左腕なんか無理…っ!」

「えっ!?!じ、じゃあ…今、俺の左腕掴んでる」のって…誰?」

一瞬の沈黙が俺と赤毛ちゃんを襲う。いや、厳密には頭では理解しているけど、現実を認めたくないだけだった。だっつてい今だぞ?俺と赤毛ちゃんが廊下に出たのは。その前後で誰ともすれ違ってないし、俺の左腕を掴んでいるのが赤毛ちゃんではないとすれば…。

俺は赤毛ちゃんにアイコンタクトを送り、そしてゆっくりと決して見てはいけない左側へ視線を移した。すると、そこには…。

「……………」

凡そこの世のものとは思えない、何とも形容し難い「何か」がいた。こういう時、人間つてどういう行動をとるか分かるか？

「うわああああああっ!!!逃げるぞゴラアアアアアッ!」

赤毛ちゃんを横抱きにした俺は脱兎の如く廊下を光の速度で駆け抜けた。所詮は俺も人の子よ……お化け超怖い。

『今日こそ……海だあくっ!!』

昨日のゴタゴタなんか微塵も感じられないくらい、俺以外の高らかな声が浜辺に響き渡る。ああ、昨日のことなんか忘れて楽しもうじゃないか……つて、やつぱ無理っ!お化け超怖いんだよっ!俺、あの後結局不思議ちゃんに付き合わされて明け方まで旅館の中徘徊させられたんだぞ!?!いつあの化け物と遭遇するかずつとヒヤヒヤしながら、不思議ちゃんの訳わかんない話も聞かされ続けたんだぞ!?!お陰で心も身体もヘトヘトだ。今日はとてもじゃないけど、遊ぶ気分にはなれ……うおっ!?

「ごみんごみん!ボールとつて〜」

「みねる、てめえ……!」

明らかに俺の顔を狙ったボールの軌道、俺は見逃さなかったぞ? どうやったら波打ち際でバレーボールしてんのに、砂浜のテントの下にいる俺に飛んでくる?

「何よう、ちよつと手が滑っちゃっただけじゃん。それよりさあ……どうよ?みねるちゃんの水着姿の感想は?」

普段白衣ばかり着てるのを見ていただけあって、年相応の健康的な身体が主張している……ぐっ、結構スタイル良いじゃねえか。素直に

認めたくはねえけど…。

「あー、はいはい。良きですねっ」

「ちよちよちよ!?何そのテキストな返事!?あくん!お世辞でもいいからあたしにも可愛いつて言つてよお〜!?他の子には言つてるんでしょ〜!山田くんの甲斐性無し〜!」

「なっ!?人聞きの悪いこと言うなっ!!てか、他の子には言つてるって誰のこと……………あっ」

俺の脳裏にふと先日のドールちゃん風呂場乱入事件が思い浮かぶ。確かあの時黒ビキニを着てたんだよな……………あっ、今日も着てるわ。じゃあ、ドールちゃんがみねるに……………あっ!視線逸らしやがった。「ほくら、観念してあたしを褒めなさいよ〜♪」

ずいっと俺に顔を近づけるみねる。前屈みになった所為か普段白衣に隠された豊満な胸がより強調されて凄いことに……………ま、負けねえぞ……………俺は欲望に打ち勝つんだ!

「……………か」

「か?」

「か……………可愛い、と思うぞ……………これで文句ねえだろ!?ほら、さっさとボール持つてけよっ!」

ああ、もう!何でこんなにテンパってるんだよ俺は!?みねる相手にたかだか可愛いって言うだけだろうが……………つて、みねるだけじゃねえな。この感じじゃ多分ドールちゃんも赤毛ちゃんも不思議ちゃんもピンクちゃんも、果てはツン子ちゃんにですら可愛いなんて言えそうにねえな……………頑張つて女慣れしよう。

そんなことを考えていると、俺からボールを受け取ったみねるが他のメンツのところまで走つて戻ろうとしたが、不意に立ち止まって俺の方へ振り返つた。な、何だ……………?

「…山田くん、ありがとねっ。君に褒めてもらったのが、旅行中で1番嬉しいよっ♡」

屈託のないみねるの笑顔が俺に向けられる。相変わらずズルい奴だぜ……………そんな言われたら変な意地張つてんのがバカみてえじやんか。あく辞めだ辞め!悩むのお終い!折角の旅行だ……………楽しむ以

外選択肢ねえよな！

「ふっふっふ……ノーコンみねる！そんなダメダメアタックじゃ世界は狙えねえぜ！ドールちゃん、赤毛ちゃん！チーム戦でみねるをボコボコにしてやろうぜ！」

「んなっ！勝手にチーム決めた上にルールまで……その挑戦、受けて立っつ！あてなちゃん、せれねちゃん！山田くんを徹底的に攻撃じゃっつ！」

今、虎と龍による頂上決戦が始まろうとしていた。あつ、年少組の孝士くとツン子ちゃんは今回は外れてもらうよ。だつて……これは命の危険が伴う戦争だからなあ？

「みねる、分かってんだろうなあ？お互い大将立てたつてこの意味をよお？」

「ええ、勿論。負けた方が……今日のお昼全奢りよ!!」

ふっ、どうやら考えていることは同じのようだぜえ……この勝負、お互い同意と見た!!童貞無職の火事場の馬鹿力、見せてやるぜゴラアアアアッ!!

「くっそ〜！みねるに負けるなんて屈辱以外何もかもねえわ!!オマケにドールちゃんと赤毛ちゃんに借金する羽目になるなんて……2人とも、本当にすんませんっ!!」

「あ、あはは……まあ勝負は時の運つて言うし、今回はたまたまだよ。きつと次は勝てるさ。だからそんなに落ち込まないでよ。ねっ？」

「あらあ、きりやちゃんったら随分山田くんに優しいわねえ。私はちやくんとツケにしておくわよ？ところで山田くん……私、誠意つて身体で示すべきだと思うのよねえ。帰ったら山田くんの身体、貸して

もらっても良いわよね〜?」

ドールちゃんが妖艶な笑みを浮かべながら、俺の身体にピトツと擦り寄ってくる。いやいや、昨日そういう冗談やめてって言ったじゃん……んっ、どしたんだドールちゃん?

「(私、本気にしちゃいますからね…?だから、これからは誠心誠意誘惑しちやいますから、覚悟して下さいね♡)」

「……はっ!?ち、ちよつとドールちゃん…?」

突然の宣戦布告に困惑する俺に対して、可愛らしくウインクするドールちゃん。耳打ちしてきたので赤毛ちゃんには聞こえなかったみたいだけど、それが俄然興味を惹いてしまったようだ。

「フレイ!?今山田くんは何言っただの!?何かすっごい顔赤くなってるけど!?!」

「んふふ。ひ・み・つ♪ほらほら〜、早く買いに行きましょう〜」

「ちよつと待ってってば〜!?山田くん、後でちゃんと教えてよ?絶対だからねっ!」

ルンルンでスキップしていくドールちゃんと困惑しながらそれを追いかける赤毛ちゃん。ううむ……これは、非常に非っ常くに困ったことになったかもしれない。でも今は、極々ありふれたこの幸せを噛み締めていたいと思うのは贅沢な考えなのかな。偶にはこういうのも有りじゃなんじゃありませんかねえ?

「……見つけた。今度こそ仕留める…!!」

何処からか俺を見つめる怪しげな気配に最後まで気づかないまま、女神寮初めての旅行は無事終了したのだった。

そして、それはこれから始まる事件の前触れでしかなかったことを俺はまだ知らない…。

第6話 袋小路、そして強襲。

「……『星間祭』？何だそれ？」

「あたしたちの大学の学祭だよ。この日は一般のお客さんも大学に入れるんだ。みんなに聞いたら孝士くんたちにもぜひ来てもらいたいって。2人ともどうかな？」

夏休み中の旅行から戻ってきて暫く経ったある日、みねるから一枚のチラシが俺と孝士くんに手渡される。学祭ねえ……そういえば忘れてたけどここって大学の寮だったんだよな。

「うわあ〜！俺、行きたいっす！そうだ、すてあも誘ってもいいですか？」

「おお、ウエルカムウエルカムだよつ。それはいいんだけど……もう傷は癒えたのかい、孝士くん？」

んっ……？みねるが何やら意味深な発言をしているな……ええ!?こゝ、孝士くん……何だその滝のような汗は!?まさか、こいつらに何かされたんじやなからうか？

「傷？孝士くん、なんかされたんか？」

「えっ!?いいいやそのお……少し前にあてなさんたちがお弁当を忘れたことがあります……それでその、大学に届けに行くにあたってフレイさんに女装させられて……で、でも俺やっぱ皆さんの色んな姿見たいっすから！」

そ、それは……難儀なことだ。心中お察しします案件だな、男にとつては。俺ももう少し若ければ……いや、若くても絶対しないしさせないだろうよ！

「わかった、それで山田くんはどうする？特に予定とか無ければ孝士くんたちに付いてもらいたいんだけど。保護者的な意味で」

「そうだな……何もなけりゃ行けるとは思うんだが、もしかしたら当日は少し遅れるかもしれない。少し寄るところが出来るとはかもしれないんでな」

「寄るところ？コンビニとか？」

「……まあ、そんなとこだ。なるべく行けるようにするけど、時間に

なつても居なかつたら先に見て回っていいぞ?」

俺は一応間に合わなかつた場合の予防線を張っておく。俺に合わせて孝士くんたちが見て回れなくなるのは良くないからな……それに、俺にはあの『復活の報告』が不穏な気配を醸し出しているように思えてならない。無駄足かもしれないが、調査の必要があると判断するぞ俺は。

「わかりましたっ。じゃあ明日、すてあにも伝えおきます! 楽しみますね〜♪」

孝士くんはすっかり乗り気みたいだな。多分この調子ならツン子ちゃんもきつと同行してくれるだろうさ。なら、俺も気兼ねなく調査に専念できるな。俺の感が間違っていなければ、この学祭までに必ず何かが起こる……ような気がする。

「孝士くん、あてなちやくん! いらっしやくい♪……って、あれえ? 山田くんは〜?」

星間祭当日、私は服飾サークルで衣装提供をしてる傍ら学祭実行委員ボランティアとしても活動しています。こう見えても何処に何があるかバツチリ頭に入ってるの、えっへん! でも、孝士くんとすてあちゃんの姿は見えたけど山田くんは……折角頑張つてオシヤレしたんだから、見てもらいたかったなあ……。

「山田さんなら少し遅れるかもって言っていました。何かすごい急いで出て行きましたけど、どこに行ったかまではちよつと……」

「いや、あれは多分……『女』だなっ」

「そうなんだあ……はいっ!? すてあちゃん! い、今なんて言ったあ!?!」

い、今すてあちやんが聞き捨てならないことを言った気がする〜!?
何なのよ、女の子つて〜!!そんなの聞いてないんだけどお!?

私はすてあちやんの肩を掴んで、ブンブン揺らします。

「うわあ!?さ、触るなっ!おれは暑いんだっ!!」

「ねえ、知ってるんでしょ!?そんなこと言って本当は山田くんがどこ
に行ったのか知ってて誤魔化してるんでしょ!?隠してないで教えて
よお!」

「フ、フレイさん!?お、落ち着いて下さいよ!ハイライト消えかかって
ますからっ!」

うう〜!?絶対誤魔化してるよねえ!だって山田くんは童貞無職な
んだよ?それなのに女の子と知り合える訳ないじゃんつ。そりや
まあコスプレの趣味に理解あるし、意外と身体も筋肉質でガツシリし
てるし……顔もどちらかといえば、かっこいい方だけでも……でも
でも、そんな社会的地位が底辺の山田くんを誘惑してあげようなんて
思う超絶優しい女の子なんて、私くらいだもんっ!絶対絶対そうだも
んっ!……はっ!あ、あれ?私……今何してたんだっけ?何か急に
意識が遠のいて、すっごい変な夢を見てたような気が……あれっ!
す、すてあちやんが気絶寸前に〜!?どうして〜っ!?

「お、おれ……もう駄目……がくっ」

「す、すてあちやん!!ご、ごめんねえ〜!?わ、私ったら本当どうし
ちやっただのかしらあ……?」

「だ、大丈夫すすよ!!体質的な奴なんで、冷やしてやれば多分回復す
るっす!ほら、対策用に持ってきたこの保冷剤で!」

咄嗟に孝士くんがバッグから保冷剤を2つ取り出して、すてあちや
んのほっぺたに当ててあげる。すると、みるみる元氣を取り戻してい
くすてあちやん。良かったあ……!

「……はあ、はあ……も、もう少しで溶けるかと思ったぞ……!」

「あう〜!本当にごめんねえ!?私も何であんなことしたのか、自分で
も分からなくて〜っ!」

「だあああ〜っ!!そう言いながらまたくっつこうとするなっ!!」

違うのよ?本当に申し訳なく思ってるだけで、あわよくばすてあ

ちやんから山田くんの情報を聞き出そうだななんて1つも考えてないのよお？

「……あれっ？フレイさん、ポケットから何か落ちましたよ……この小瓶は？」

「あつ、それはさつきみねるちやんから預かったの。甘い匂いがしてリラックス効果があるとか」

「……おい、この瓶のラベルに『みねる印のマル秘薬』って書いてあるぞ。これ何かヤバイ液体じゃないのか……？」

あらく？そういえばさつきちよつとだけ匂いを嗅いでみて、なんかふわふわした気分になったけどお……あれ、何だったのかしらあ？その後急に山田くんのが頭から離れなくなつてえ……最近ずっと寝ずに衣装作つてたから疲れてるのかなあ？

「……そうですか。じゃあ目撃証言は無いと？」

孝士くんたちが学祭で女神寮の住人たちと会っているのとはほぼ同時刻、俺はオツさんに旅行後から頼んでいたとある人物の照会結果を確認していた。その調査結果をオツさんは気怠げに教えてくれる……でも、その表情はどこか怪訝なものだった。

「ああ、そもそも入国の記録すらねえつてよ。そいつ本当に生きてんのか？」

「……そのはずなんですけどね、確証は無いですけど」

「大体どういう関係なんだあ？こんなヒゲゴリラと……見るからに悪人面だろ」

俺が事前に手渡していた写真を眺めながら、依頼者である俺に写真の人物との関係性を尋ねるオツさん。本当はあまり詳しいことは言

いたくないんだけど、警察のついで調べられたらすぐに分かることだし……素性だけでも言っておくか。

「その写真の男、実は海外マフィアのボスなんです。と言っても、もう何年も前に組織ごと壊滅しちゃってるんですけどね」

「……全くよお、毎度毎度どっからそういう情報仕入れてくるんだか。俺はもう一々驚かねえぞ」

半分呆れながら俺に写真を押し付けてくるオツさん。順応性高いですね、出世しますよ。

というどうでもいい話は置いて、まあこれで分かったことがある。まずこの写真の老人は確かに死亡しているということ。そしてその情報を秘匿したままであって「組織の復活」という状況を作り出した人物がいるということ。それが誰かは不明だけど……。

「とにかくこれ以上は調べてもらうのも時間と労力の無駄になりそうなので、後は自分でやります。休日なのにわざわざありがとうございます。ありがとうございました」

「……おい、お前何隠してやがるんだ？」

写真を受け取った俺は根掘り葉掘り聞かれる前に立ち去ろうとするも、すぐに呼び止められてしまう。うー、やっぱそれ突っ込まれるよなあ……あまり触れてほしくない話題なんだよねえ。ちよつと誤魔化すか？

「……別に何も。俺が世話になってる大学の学祭があるんですよ。俺、そのこの住人たちに誘われて……もう始まってる時間なんで急がなきゃいかんですよっ」

「ほくん………“女”か？」

「はあ………まあ、確かに女性に誘われましたけど。でもそれが何か……？」

「………いや、別にいいんだけどな。引き止めて悪かったな、さつさと行けよ……二度と俺の貴重な休日を邪魔すんじゃねえぞ」

何かすっごい小馬鹿にした顔してるんだけど………まあ、あんまり突っ込んでこなかったから良かったか。とりあえずこっちの用事は済んだし、少し遅れたけど今から向かうか。

あと、何でかわからないけどすっげえ嫌な予感がする。さつきから寒気が治らんのよ。多分だけど、ドールちゃんかみねる辺りに超嫌味言われそうなんだよなあ…。

「……………むっ」

「ん〜?どうかしたのせれねちゃん?」

「……………今、山田の気配を感じた。恐らく、近くまで来ている」

えっ!?そ、それ本当かしらあ!じゃあすぐに迎えに行つてあげなくちや……………迷ってないかを確認するためであつて心配してる訳じゃないんですからねっ?

「でもお、私は孝士くんとすてあちゃんを案内しないといけないし……………山田くんも迷つてるかもしれないのよねえ。どうしようかしらあ?」

ふっふっふ、敢えてここは困っているふりをしておくわあ。優しい孝士くんなら〃それなら俺たちのことは気にしないで迎えに行つてあげて下さいっす!〃って、言ってくれるはずだもん。そしたら仕方なく仕方なく私が迎えに行く口実が出来るものねえ〜。そして、あわよくば2人つきりで学祭を回れるし……………ぐふふ♪

そんなことを考えていると、私の肩にポンつと手が置かれたわ。んっ?どうしたのせれねちゃん?

「その任務、任された。フレイは他の者の案内、よろ」

その言葉を最後にぴゅ〜と走つて行つちやつたわ。あう……………私が迎えに行くはずだったのに〜!真っ先に迎えに行つてこの服も見てもらいたかつたにい……………んふふ♪胸元が強調されてるこの服を見て焦つちやう童貞の山田くん……………可愛いんだろぅなあ♡しようがな

いから寮に帰った後、みんなが寝静まった頃に山田くんの布団の中に潜り込んじゃおうかな？

「じゃあ山田くんはせれねちゃんに任せて、私たちはあてなちゃんがいるカフエに行きましょっか♪」

「えっ、それってもしかしてさつき見た…」

「ああ、あのやけに本格的なメイドカフエだな」

「あら〜？もう見ちゃったのお…：ネタバレ厳禁なのにい。でも、あてなちゃんのメイドさん姿はきつとうつとりしちゃうんじゃないかしらあ…：きやつ！」

「あつ、ごめんなさい！私、うつかりしてて…」

少し考え事をしていたら、すれ違い様に女の子と肩が当たってしまったわあ。私ったら駄目駄目よね！ちゃんと謝らないとっ！

「…：あつ、もしかして今ぶつかつた？いいよ、こつちも気づかなかつたから」

あ、あれ？何かすっごいクールな女の子なのねえ。折角可愛い顔してるのにムスツとしてるのもつたないなあ…：あつ、行っちゃった。

でも、何かあの女の子から知ってる香りがしたような気がするんだけど…：私の気のせいなのかなあ？

えっ、それって誰かですって？それは、その…：えっとお…：や、山…：いい、言わせないでよお〜っ！

「フレイさん…：どうしたんだろう？」

「あんま気にするなよ。いつもの百面相だろ」

もお〜!?それもこれもみんな山田くんが悪いんですっ！帰ったら絶対責任とってもらおうからねっ！

「ふい、ようやつと着いたかあ。意外と時間掛かつちまつたな……ってかこの大学、ちよいと広すぎやしねえか？これ普通なんかねえ……」

オツさんとの会合を終えた俺はそのまま女神寮の住人たちが通っている大学に足を運んだ。学祭ということもあつて辺り一面に広がるのは華やかな女子大生、煌びやかな女子大生、愛らしい女子大生……そして偶に一般客。言葉では言い表せないけど、何かこうグツと込み上げてくるものがあるなあ……スッゲーいい匂いしそう♡

「山田、ニヤニヤするな。気持ち悪い」

「ええ？んなこと言つても、こんだけキャピキャピされちゃあよお。パツと見だけど顔良し性格良しスタイル良しと来た！これぞまさしく選り取り見取りつてやつだぜ……って!?!ふ、不思議ちゃん!?!いつからそこに!?!」

俺は何の気無しに聞こえてきた声に答えてしまった。だが、数秒後にその相手を視認してしまい、俺は事の重大さを痛感させられてしまう。

「『この大学、ちよいと広すぎやしねえか？』 辺りから。バツチリ全部聞いた」

「いやあ……たはは、それは気がつかなかつたなあ。不思議ちゃんつてば忍者にでもなるつもり？」

「……さっき言つてたこと、他の者にも共有する」

「ちよちよちよい待ち!?!タンマ、タンマ!!」

無表情のまますぐに報告しに行こうとする不思議ちゃんを俺は必死で止める。あ、危ねえ……在らぬ噂を立てられる所だつたぜ。というか、不思議ちゃんつてこんな悪戯っぽいことするような子だつたか？そういうのつてみねるとかドールちゃん辺りがするもんだとばかり思つていたが……？

「山田、注文が多い。でも、もし山田さえ良ければ……」

「えっ!?!それつてどういう……」

初め俺に文句を言つていた不思議ちゃんだったが、急にしおらしく

なり身体をくねらせて頬を赤く染め始める。えっ、何これ……もしかして誘ってる？ いやいや何きっかけで!? 今までの話のどの辺りでそのスイッチ入ったのお!? わ、分からない……分からないこと尽くめだっ!?

「月の話、まだ話してないこと教えてくれたら許す」

……あつ、そういう感じ? もしかして急にしおらしくなったのもほつぺた赤く染め始めたのも知的好奇心からくる興奮ってこと? うわあ……俺がつつり勘違いしてたんかあ。いやそうだよなあ。確かに不思議ちゃんって無表情だし偶に何言ってるのか分かんねえ時もあるけど、小柄な割にはスタイル良いいつも着てる体操服も年季入ってるのか胸元ウルツウルだしブルマもパツツパツだし……あれ、何か無性に不思議ちゃんがエロく見えてきた。これヤバくね? 末期か?

「……ぜ、是非お話しさせて頂きますわ♡」

「ふふふ、ならば即実行しよう。他の者に聞かれるとまずい、せれねが普段隠れ家に使っている”秘密の場所”に案内する」

ごめん、俺耐えられなかった。理性とかって頑張っても結構一瞬で崩壊するもんなんだねえ……無理無理、1回意識し出したらずっと可愛く見えるのが童貞の掟だろ? 現に今、不思議ちゃんが可愛くて可愛くて仕方がないもん……多分一過性のものだけど、思い込みって怖いよねえ。

「見つけたわよっつ! 八月朔日せれね! 今日こそ解剖させなさくいつ!!」

「…何だあれ?」

不思議ちゃんに手を引つ張られて連行される直前、遙か遠くから白衣を着た女子大生が不思議ちゃんを目掛けて何か叫んでいた……おつ、可愛こちゃんだフゴオ!?

「山田、下心丸見え。反省すべし」

うぐう……不思議ちゃんに脇腹つねられた。痛え……ちよつと本気でやってない? そんなムスツとした顔しないでよ……折角可愛い顔してるんだからさ。

「それにしてもあの子って誰？不思議ちゃん知り合い？」

「むう……しつこい奴。山田、予定変更だ。せれねはこのまま逃走を図る。山田はきりやが居る講堂に退避するのが一番近くて最善策じゃ、よろ」

不思議ちゃんはそれだけ言い残して風のように去って行った。心なしか逃げ慣れてるように見えたのは気のせいなのか？。もしかしなくても普段から追いかけて回されてたりするのか。まあいいか、とりあえずこれで俺も自由に動き回れるな。よしっ、じゃあ不思議ちゃん
の要望通り講堂に行ってみるー

「そうやって事なかれ主義だから、こういう目に遭うんだよ」

背中からサクツという小気味の良い音と共にブチブチと肉を引き裂く感触と焼けつくような激痛が走った……。いや、地に倒れ伏すまでそのことすら認識出来なかった。それほどまでに鮮やかな手口だったのか……。まだだ、せめて自分を刺した犯人の顔だけでも……。何か情報を落とさないと……。凶器は恐らく、小型ナイフで……。くっそ……。駄目だ……。意識が、遠のいてきやがった……。だ、誰なんだよ……。この野郎お……。

「ただいま。いやあ、今年の星間祭も色々あったねえ……」

学祭が終わってボクはみんなと少し遅れて寮に帰ってきた。結局山田くんは来なかったみたいだけど……。もしかして何かあったのかな？そんなことを考えながら談話室に入ると、その話題の人物がボクに話しかけてきた。

「……おう、おかえりんさい。随分盛況だったらしいじゃんか？」

「や、山田くん！もう！どうして来てくれなかったのさ！？何の連絡も

無かったから何かあったんじゃないかって、心配したんだよ?」

「…ははははっ、赤毛ちゃんは心配性だな。確かに学祭に行けなかったのは悪かったし、その件でついさっきまで他の住人たちから糾弾された所だよ。だからこれ以上責めないでくれよ…」

そう言つて、申し訳無さそうにする山田くん。うう…：…いつもみたいに軽口で返してくれないと調子狂うなあ!?それに何でかわからないけど、弱々しい山田くん…：…守ってあげたくなくなるなく!」

「べ、別に責めてるわけじゃ…：…見に来てくれるって言つてたから、ちよつとだけ楽しみにしてたつていうか…：…」

「…：…ああ、何だっけ。確か『男装コンテスト』だったか?そりやまあ見なくても結果は分かりきってるもんなあ…：…赤毛ちゃん以上にかっこいい女子なんて居ないってさ」

「…：…へえ、そうなんだあ。ボクは『かっこいい』んだ?ふくん…：…」
「…：…えっ?あ、ああ…：…そう、だけど…：…あれ、俺何かまずいこと言つたか?」

何の気無しにボクをかっこいいと褒める山田くん。くう…：…そりやそう言うだろうとは思ったけどさ。でも、ボクだつて一応女の子なんだから…：…そこは気を利かせて可愛いって言つてくれても良いじゃんか…：…。そう感じた時、気づけばボクは少し怒つて部屋に戻り始めていた。

「あつそ。じゃあそう思つてれば良いんじゃないかなっ!おやすみっ!」

「あつ、ちよ…：…赤毛ちゃん!?待つ…：…!」

ボクは山田くんの制止も振り切つて彼を突き飛ばすと階段を駆け上がつて部屋に戻る。山田くんの馬鹿!鈍感!甲斐性無し!女の子に対してかっこいいって何だよ!!それってあまり褒めてないんだからねっ!?!ボクが少女漫画好きなの知ってるくせに気の利いた言葉の1つくらい言つてくれないのに…：…悔しいなあ。一度でいいから『かっこいい』じゃなくて『可愛い』って言われてみたいの…：…山田くんの馬鹿っ!

「…：…きりや、何故怒つてる?」

「せ、せれね……別に、ボクはいつも通りだよ。うん、いつも通りさ」
2階に上がった時に丁度部屋から出てきたせれねと鉢合わせになった。ボクの顔を見るなり突然そう言ってくるせれねに驚いて、慌てて取り繕ったけど……ご飯以外で自分から話しかけてくるなんて珍しいなあ。

「そうは思えない。明らかに怒ってる……山田が何かやらかした？」
「なっ……どうして、山田くんが出てくるのかな？」

まさかせれね……気づいてるのかな?! いやいや、ボクは何も言っていないしきつと当てずっぽうだよねっ!?

「山田はトラブルメーカー。山田の行く所、常に一悶着あり」

「……それは、よく分かる気がする。おまけにデリカシーも無いし、偶に挙動不審になるし……それにこっちの都合なんか全然お構いなしな所も……」

「OK、それ以上はやめよう。多分、止まらなくなる」

ボクが山田くんへの愚痴をこぼし始めたところで、せれねに止められてしまった。あう……もつと話したいこといっぱいあるのにい! こんなの生殺しだよお!

「だが、山田も罪作りな男だ。結局のところ、学祭中は何処にも顔を出さなかったみたい……午後には既に到着してたというのに」

「そうなんだ……へっ!? せれね、それ本当!？」

ボクはあまりの動揺ぶりを抑えきれず、せれねの肩を掴んでその言葉の真意を問いたです。ブンブン、ブンブン……あつ、せれねが気絶寸前に!?

「ぐふっ……脳波に異常発生……行動に支障をきたす恐れあり……がくっ」

「うわあーっ!? せれね、ごめんよ〜っ!! 頼むから起きてくれ〜!？」

あわわ、あわわわ……!? どうしよ、どうしよお!? とりあえずせれねを部屋に運ばないと! 山田くんを問い詰めるのはそのあとだよね!

でも、どうして山田くんは学祭に来れなかったって嘘ついたんだろ
う……? それに、何処にも顔を出さなかったってどういうことなんだろ
……?

「ふっふっふ♪そろそろみんな寝静まった頃かしら？時間は深夜1時、寝込みを襲うには丁度いいわよね。それじゃあ、早速山田くんの布団に潜り込もうと♡」

学祭の最中からずっと計画を練ってたんだもんね。来てくれるって約束したのに破った山田くんがいけないんだよ？お仕置きとして「明日の朝まで一緒に布団で寝ちやうの刑」を執行しなくちゃ！ふふふ、明日の朝起きてびっくりしちゃう山田くんの顔が目浮かぶなあ♪

私は他のみんなに気づかれないようにこそそ部屋を抜け出して、そのまま静かに階段を降りる。孝士くんが悪戯した前科があるから、あてなちやんに警戒されてるのよね。まあ、山田くん相手ならそれも大丈夫みたいだし……そういえば最近きりやちやんとせれねちやんが山田くんのことをよく話してるみたいだけど……もしかして、2人とも山田くんのこと好きなのかしらあ？

「……なんて言ったら、いつの間にか山田くんの部屋の前に着いちやった。今更だけど今日の下着……ちよつと派手だったかしら？孝士くんは勿論だけど、童貞の山田くんにも刺激が強すぎるかなあ？一応ネグリジェなんだけど、これ露出度高めだから透けそうなのよねえ……よしっ、それじゃあお邪魔しまっす」

意を決して恐る恐る扉を開ける。室内は電気が消えてるから暗くて殆ど見えないけど、前にも入ってるし配置も変わってないはず。確か右側に孝士くん、左側に山田くんだったわよね？音を立てないように四つん這いで移動するわよ。あつ、孝士くんすっかり寝込んでちゃってるわね……寝顔も可愛い♡それじゃあ隣の山田くんのだら

しない寝顔でも拝見しようかしら……んっ、あれ？

「……山田くんの布団、濡れてる？何かしらこれ……汗じゃないわよね？まさかおねしょ!?……なわけないか。でも、ちよつとあったかいわね」

結論から言うと、布団の中に山田くんはいなかったわ。でもシーツや布団に染み込むほどの“何か”が残されていたの。私は暗闇の中、指先でそれを拭って匂いを嗅いでみる……すると、すぐにその正体が判明したわ。

「これって……もしかして“血”!?えっ、どういうことなの……?それより山田くんはどこに!？」

頭の中に最悪のケースが過った。血塗れの布団、もぬけの殻、行方不明の山田くん……何か事件に巻き込まれてるの?その時、部屋の外で何かが倒れるような物音がほんの一瞬だけ聞こえた。

「今のって……もしかして山田くん?」

私は焦る気持ちを抑えて廊下に出る。すると、さつきは閉まっていたはずの玄関の扉が少しだけ開いているのを確認したわ。そして、そこに至るまでの床に点々と血痕が残されているのも……玄関に近づくとつれて血痕の量がどんどん増えていくことも。

「あ、ああ……そんな、山田くん……お巫山戯が過ぎるよお……もう悪戯しないから、だから全部嘘だよって言っつてよお……!」

私は自分に言い聞かせるように希望的な言葉を呟く。でも現実是非情で玄関を開けて外にある景色を見た瞬間、私の中の全ての希望は絶望へと姿を変えたわ……

「……っ!?や、山田……くん?こんな所で寝てちや、ダメだよ……?ほら、私が布団まで運んであげる、から……ねえ、起きてよお……!」

私の目に飛び込んできたのは、玄関を出てすぐのところまで地面に倒れ伏している山田くんの姿……声を掛けてもぴくりとも動かない、身体の下にはさつき見た液体が溢れ出て……大きな血溜まりが出来上がっていた。呼吸がどんどん浅くなっていく山田くん……このままだと本当に死んじゃう……!

「山田くん……ごめんねっ!んんっ……!」

私は山田くんを玄関の明かりの下まで引き摺って移動させると、そのまま服を脱がせて出血してる箇所を探すわ。本当はすぐに呼吸を安定させないといけないんだけど、先に出血を止めないと危険だもんね。

「えつと……胸とお腹、には傷が無いかしら？じゃあ背中……山田くん、ちよつと苦しいかもしれないけど身体動かすよ？」

私は山田くんの身体をうつ伏せにして背中が見えるように上半身だけ完全に服を脱がせる。すると、前に見た背中の中古傷とは別に新しく刺された傷があるのを発見したわ。包帯が巻いてあるから一度手当てしたみたいだけど、血が滲んでるってことは傷口がまた開いちやつたのね……早く止血しないと！

「落ち着け、私……そうだ、部屋にタオルがあったはず！あと替えの包帯も……ちよつとだけ待っててねっ！」

私は部屋に戻ってタオル、談話室に置いてある救急箱の中から包帯を取り出すと急いで山田くんのもとへ戻るわ。ああ、今にも消えてしまいうまくない虚ろな目をして……絶対、助けるからっ！

「止血のやり方って……傷口に布を当てて、上から強く押して圧迫するのね。山田くん、痛いけど我慢してねっ」

私は素人ながらも必死に傷口を押さえつけて止血を試みる。でも……全然上手くいかない……えつ、これ……手？

「……ド、ドールちゃん……そのまま、押さえて……」
「や、山田くん……!?大丈夫なの!？」

「……いい、今のところはね。でも、ちゃんと止血、しなかったから……ぐう!？」

よ、良かった……ちゃんと、生きててくれたんだ……!うう……死んじゃうかと思っただよお!!?

「ぐすつ……そうなんだあ、でも心配かけたから許さないっ」
「……いや、今それどころじゃ」

力無く抵抗してくる山田くん。でもそれじゃ私の気が収まらないもの……だから、こうしちゃうもんねっ！

「だ〜メ♪みんなが起きてくるまでずっと一緒だからっ。絶対離さな

いからね♡」

「……せめて完全に止血してからにしてくれよ、そのテンション」

んふふ、軽口で返せるってことはだいぶ元気になったみたいね♪いいよ……山田くんとならいつまでも一緒にいられる気がするよ♡

動けるようになったら廊下の血痕と血塗れの布団、綺麗にしないかね？

「なあ、ドールちゃん。詳しくは言えないんだけど……気づいてくれてありがとな。多分、あのままだと誰にも気づかれないで、息絶えてたと思うからさ……」

「……良いですよ、山田くんの秘密主義は今に始まったことじゃないですから。話す気になるまで気長に待つわ」

「……そうか。悪いな……」

そう言つて、再び意識を失ってしまった山田くん……あつ、今度は普通に寝ちゃったんだね。さっきまであんなに緊迫した状況だったのに、呑気だなあ……それは私も一緒かな。

私は寝ている山田くんの髪を撫でる。男の子なのに意外とサラサラしてるんだね。でも、ちよつと伸び過ぎだよ。前髪とか目に掛かっているし、襟足も外にはねてるもん。後で切つてあげようかな？ ああ、何か色々なこととしてあげたくなっちゃうの……これつてどういうことなのかしら？